



おきな草



新連載

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第一回 おきな草、胡瓜草

短歌では花や木がよく詠まれています。その中でも目立たない野草の花や、穂草、木の実といったものに注目して、詠まれた歌を紹介していきたいと思います。

五月、山形県上山金瓶村の斎藤茂吉生家を何度か訪れたことがある。庭にはおきな草（翁草）やおだまきが咲いている。茂吉墓前祭で賑わう路地の詰所にはおきな草の鉢植えがたくさん置かれている。茂吉といえば「おきな草」なのである。茂吉はさまざまな草花を詠んでいるが、中でもおきな草への愛着はひと通りではない。

おきなぐさに唇ふれて帰りしがあはれあはれい
ま思ひ出でつも

斎藤茂吉「赤光」

唇をふれるとは！ 東京にあつてふるさとを思う歌の一首である。「あはれあはれいま」は、歳月も過ぎて遠い地で、今思い出したことよ、という詠嘆である。おきな草は茂吉にとってふるさと、みちのくの春なのだ。

おきな草の花はうつむいて咲く。その茎から外側のはなびらまで白い産毛におおわれていてピロロドのよう。花の内側は黒っぽい赤。あの産毛に唇をふれてしまふ気持ちもわかる。

おきな草口あかく咲く野の道に光りながれて我
ら行きつも

母が亡くなって葬りのためにふるさとの野辺の道を行く連作の中の歌である。茂吉にとって「赤」はいのちの色。口あかく

咲くおきな草と光、うつとりするような春だけをこの一首はうたって生と死を際立たせている。

おきなぐさ黒き花咲き遅々として来む春を待つ
牛もわれらも

石川不二子「牧歌」

三歳になる子がつくづくと見凝めつつ怖しとい
ひしおきなぐさの花

同

鳥根県三瓶山の麓に入植して共同酪農をする戦後の歌である。冬は豪雪の年もあったらしい。ひたすらに春の待たれる牛と人。おきな草はやはり遅い春と重なっている。茂吉は「口あかく」と詠んでいるが、これは「黒き花」。歌にするとずいぶんイメージが違う。中間の気がするけれど。

不二子はおきな草が好きなようだが、幼い子は怖い、と言う。確かにちよつと不気味かも。のちに花の中から白い絮がふわっと迫り出してくるときよつとする。翁草という名はここから来ている。

◇◇◇

も

う一つ、取り上げてみるのは胡瓜草。こちらは、どこにでもある野草である。とても小さな可愛い空色の花をつけている。勿忘草の花に似ていて、もっと小さい。梨木香歩が小説の中で「ひめわすれなぐさ」と呼んで胡瓜草を書いている。草なかに胡瓜草だけ選りわけて摘みたり私の脳は静かに

前田康子「色水」

胡瓜草の真中はほんのり黄なること忘れてしま
う指に摘まねば

同「窓の匂い」

野の花に親しむ前田康子らしい二首。「選りわけて」と胡瓜草を摘むことに脳は集中している。小さな空色の花の芯はほんのり黄色。しばらく摘まないでいるとそれを忘れてしまうのよ。その黄は胸にともる灯りのようだ。

「胡瓜草」という歌集のある私の歌も一首。

そらいろのかすか見えぬし胡瓜草まぎれつつあ
り五月の草生に

花山多佳子「胡瓜草」



胡瓜草





どくだみ

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかし

第二回 どくだみ、月見草

よ くと見るとどくだみの花はきりつと美しく、ハート形の葉もすてき。なのに疎まれがちなのはあの強烈な臭いと、びっしりはびこる強かさのゆえであろう。

どくだみの花のほひを思ふとき青みて迫る君がまなざし

北原白秋「桐の花」

どくだみのおいに思う君、とはちよつとひどい。実際は君のまなざしを見てどくだみの花を思ったのだから、この語順が鮮烈だ。あきらかに君に辟易して、うつとうしいのだ。

でも、どこか魅惑的。「女は白き眼をひきあけてひたぶるに寄り添ふ、淫らにも若く美しく」という詞書がある。青むほどの白い眼。それはどくだみの花の白さを思わせる。

色硝子暮れてなまめく町の湯の窓の下なるどくだみの花

同

銭湯の窓に赤や青の色硝子。明治から大正の頃の風景だが、私の遠い記憶にもあるような気がする。色硝子、真つ白などくだみの花、色彩のなつかしい情緒がいかにも白秋らしい。

ゆうぐれの道に迷つてゆきあたる製材所うらどクダミの花

木曾陽子「夏時間の庭」

溝沿いにドクダミのはな抜き取られつゆじめりする土が残さる

同

月見草茎立ち高くなりけり産月の身に触れてかなしく

五島美代子「丘の上」

でも大方はじめじめした裏手にはびこるどくだみ。「製材所うら」はびつたり。「溝沿い」もそうだが、抜き取られても、さっぱりはしない土が残る。抜かれたあとでも存在感あるドクダミ。地下には根がしっかりと残っているにちがいない。どくだみとは違って月見草（マツヨイグサ属）は人気がある。花が咲いていないときは見栄えのしない草だが、夜になって黄の花だけ浮かびあがると美しい。「宵待草」の唄でも知られるロマンティックな情緒がある。「富士には、月見草がよく似合う」と書いたのは太宰治だけれど、浜辺にも似合う花だと思ふ。

月見草けぶるが如くにほへれば松の木の間月缺けて低し

長塚節「長塚節歌集」

「濱へゆくみちなり」と詞書がある。「けぶるが如くにほへらう。真つ暗では見えない。だから月はどこか見える。松の木の間に低く月があった。「缺けて」に満月より風情がある。

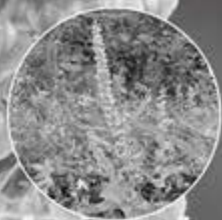
官能のいずこかすか揺れいつつ黄の月見草下駄にゆく道

水田和宏「風位」

月の夜か夕暮れか月見草が見えている。「下駄にゆく道」が田舎道っぽくて雑草の道という感じ。官能にかすか揺れているのは月見草なのか、自分なのか定かでないような歌のつながりに雰囲気がある。黄色というのどこか官能をよびさます。夜に浮かぶ月見草はそんな無意識の象徴のような花だ。



月見草



ぎしぎし

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第三回 ゑしぎし、やぶがらし

ぎし ぎしはすかんぼ（スイバ）に似ているがもっと猛々しい草で、すかんぼのようにには親しまれない。この変なおノマトベのような名前の語源は不明らしいが、ぎつしりとした花の付き方を見ると確かに「ギシギシ」という感じはする。外来種の「エゾノギシギシ」が多いらしい。冬越えもする強かな草だ。

エゾノギシギシ おまへは同志 さあ今日も野に出て緑の汗流すのだ

時田則雄「エゾノギシギシ」
この歌で始まる歌集「エゾノギシギシ」は全編ギシギシだらけ。「エゾノギシギシ」タデ科。大学で世界の五大雑草と教はった。私は親しみを込めて「こん畜生」と呼んでゐる」と詞書

がある。北海道十勝で農業をする作者にはまさに「こん畜生」の草だが、そのしぶとさに共に野に生きる同志のような親近感を抱いている。「エゾノ」はここでは文字通り「蝦夷の」の意味がこもっているように。

除草剤に爛れしエゾノギシギシの影に力のまだ残りをり

同

除草剤で爛れたギシギシの影が落ちていく。爛れない、太ぶとした影。影に力を感じる。こいつしぶとい。自分と同じだ。傷めつけられても健やかな影を地に落とすのだ。かくしてギシギシと作者は一体化していく。

ぎしぎしの赤錆びて立つこの暑さ「家族」とはつね歪めるものを

阿木津英「天の鶴片」

こちらは「ぎしぎし」という名から、ぎしぎしと軋む「家族」を引き出したレトリカルな歌。家族なんて赤錆びて歪んで暑苦しい。一九八〇年代の歌だが、家族の軋みの増す現在いっそうリアルに感じられる。

「ぎしぎし」という草は人間臭く詠まれることが多いようだ。

◇ ◇ ◇
も う一つ、名前では気の毒なものに「やぶがらし」（数枯らし）がある。葛だつて山藤だつて巻きつければ同じなのに、こんな汚名をもらうなんて気の毒な草だ。と思うのもブドウ科のやぶがらしの葉や蔓先は光つてきれいだし、つぶつぶの緑の花のあとに橙色が残るところは独特の風情があつて好きだからだ。

ヤブガラシうねりきよらにあかねさす朝のひかりに花過ぎにけり

玉城徹「香貫」

黒き蜂きたりて一つ飛ぶさへやうれしかりけり
ヤブガラシの花

同「枇杷の花」

この作者にヤブガラシの歌は多い。一首目は花の過ぎた蔓の這うさまを「うねりきよらに」と讀んでいる。「あかねさす」の枕詞をはさんだ調べもうねっているようだ。

二首目は蜂が来るのを喜んでゐるが、これもヤブガラシの花ゆえであろう。ヤブガラシの花は蜜がたくさんあつて虫がさかんに来る。その訪れがただうれしいのである。

やぶがらし闇へ闇へと這ひくだる地蔵の笑みをひとまたぎして

日高堯子「野の扉」

このやぶがらしの繁茂はすごそう。地蔵さまは藪かげにあるのだらう。「地蔵の笑みをひとまたぎ」に涙みがある。藪はおおわれて闇を深めていく。「藪枯らし」の言葉の意味が民俗的なひびきを伴って、もの暗い昔話のようなふんいきを醸している。



やぶがらし



つゆくさ

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第四回 つゆくさ（露草）、水引

つゆくさは丈低く花は小さいがその鮮やかな青にはとどろかされる。その青が雨に溶け出してしずくが青に染まるものも、いかにも「つゆくさ」という感じ。でも『万葉集』では「つゆくさ」という名前が詠まれている花だ。月草、鴨頭草とも書く。『朝咲き夕は消ぬる鴨頭草の消ぬべき恋も吾はするかも』（『万葉集』巻十、作者未詳）と、一日花の儚さを下敷きにして詠まれることが多いから「つゆくさ」の名の方が合うような気がする。

人くまぬ野中の清水とりまきて、むらがりさけり、つゆくさの花

澄んだ清水のめぐりにむらがる青いつゆくさ。夢のように美しい風景だ。明治四十三年出版の『朝夕』には野の風景、草花の

つゆくさの藍咲きいでたりけり季節ひそかにわれを過ぎゆく

二〇二〇年に出た歌集に、こんな二首があった。庭につゆくさが咲いている。ひっそりと静かだけれど、その色は鮮烈で何かを糺すようにも思える。人の中にはないしずけさだと作者は見つめている。二首目の下のフレーズは何にでも付けられそうだが「つゆくさの藍」にこそとも感じられてくる。

◇◇◇

夏 秋から秋へ、目につくなつかしい花の色は水引だ。祝いの「水引」に似ているので、この名が付けられたという。子供のころは見かけるとつい扱いてしまう花だった。その手ざわりがよみがえってくる。

みづひきの赤き二尺の花引きてやらじと云ひし
朝露の道

与謝野晶子『舞姫』

誰かといっしょに朝露の道を歩いている。行かせませんよ、と相手が言う。みずひきの花を引いて。これは扱いているん



水引

繊細な歌が多い。作者の岡稲里は三十八歳で世を去っている。

つゆ草の露にあそびてしとどなるわが目の前や
母のほうたる

池田はるみ『姥が国大阪』

「しとどなる」のは「つゆ草」でもあるし、目がしとどに濡れているとも読める。目の前を「ほうたる」が過って行く。きつと亡き母にちがいない。つゆ草が涙を引き出し、ほうたるを引き出してくる。言葉による連綿とした情緒の歌だ。そういえば「つゆ草」は「螢草」という異名もある。

庭隅のつゆくさ程のしずけさが人の中にはない
ということ

三枝浩樹『黄昏タレブスキニール』

じやなくて、長いから手折ったのだろう。二人でいる朝を惜しむ風情が水引の色とよく合う。いかにも晶子の歌だ。

眼に沁みて水引草の朱きいろ介山居士は娶らず
終りき

久保田登『残堀川』

「介山居士」は中里介山。かの机龍之介で有名な「大菩薩峠」を書いた作家である。独身主義を標榜し一生娶らず、六畳一間に菜食の簡素な暮らしを送ったという。その人生を水引を見つっ思っている。この取り合わせは何かしみじみと心に沁みしてくる。

青木伊平というひとありしゆく川のほのぐらき
など水引の花

渡辺松男『泡宇宙の蛙』

ここにも人名が出てくる。「青木伊平」は元首相の竹下登の秘書で、竹下がリクルート事件で検察に追及されているときに自殺した。人名が印象的で、ほのぐらく流れる川にばつんと「水引の花」を置いて「読忘れ難い」。

なぜか水引は人の影を連れてくるようだ。細く挽む茎に点点とつく淡い赤の粒が哀感をさそうのかもしれない。



葛

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかし

第五回 葛、犬蓼

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり

釈 道空「海やまのあひだ」

葛の花というと、この歌が思い浮かぶくらい有名な歌である。山道に散っている葛の花かもしれないが、わたしは山道に這い出した蔓が咲かせた花をイメージしてしまう。「踏みしだかれて、色あたらし。」にあの上向きの赤紫の花ふさの鮮烈さが思い浮かぶのだ。歌はそこでいったん切れて、「この山道を行きし人あり」とつぶやく。この間の静寂が深い。道空の句読点が生きる。

街中の線路の土手を蔽ひたるかたちのままに葛は枯れ伏す

柴生田 稔「星夜」

葛の葉のひるがえる白 風立てば女が砧をうつ夜となる

古谷 円「百の手」

葛の葉裏は白い。その裏を見る、というところから和歌では「葛の葉の」は「恨み」にかかる序詞になっている。(秋風の吹き返す葛の葉のうらみてもなほうらめしきかな) (古今和歌集「平貞文」というように。能の「砧」では、都に去った

夫を待ちこがれた妻が「恨みの砧、打つとかや」と謡って砧を打つ。この能を踏まえて、夫の帰りを待つ夜を現代の女性が詠む。「白」で切って、和歌のようなべたつきのない、きりつとした感じが爽やかだ。

砧はむかし葛の繊維を打つこともあった。葛は衣食といった生活に密着し、文化の伝統に息づいている植物なのである。

◇◇◇

犬 蓼は「あかまんま」という愛称で親しまれている、またことには欠かせない花だ。でも以前ほど見かけなくなつたような気がするの、うちの辺りだけだろうか。

赤飯の花と子等いふ犬蓼の花はこちたし家のめぐりに

若山牧水「くろ土」

こどもたちが「あかまんま」といって花だけだと、ありすぎてうんざりだなあ、という歌。ほんとにそのまま口に出した感じが牧水らしい。「お前は赤ままだ花やとんぼの羽根を歌うな」(歌)という中野重治の詩は有名だが、これは赤まんまに情緒的になってしまふ自分へのいましめである。「こちたし」という

率直な牧水の歌は、だからこそ、さっぱり感がある。

みちのべの紅のまんまはさきこぼるいなごとびとび日暮が近い

伊良子清白(昭和十二年作)

こちらはもろに情緒的になっている歌だ。「いなごとびとび日暮が近い」と思わず童謡みたいになっている。これぞ日本の田舎のなつかしさという感じ。伊良子清白は「孔雀船」という詩集で有名な近代の詩人である。のちに海辺の町で医者をしてながら、ひっそりと多くの短歌を残した。いい歌が多いけれど、こんな口語の歌は珍しい。これも「紅のまんま」ゆえだろう。

遺すべき何ありや秋の木洩陽に犬蓼の穂のいよよ紅かれ

塚本邦雄「初學歴然」

塚本邦雄の初期の歌。こんなにオーソドックスだったのだと驚く。「初學歴然」に塚本の植物好きは歴然だ。犬蓼は好きなようで(秋立ちぬ我れが切なき常住をはつかに彩ふ犬蓼の朱)とも詠む。「遺すべき何ありや」「切なき常住」といった人生の感傷に、犬蓼の穂の赤が寄り添う。



犬蓼



えのころぐさ

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第六回 えのころぐさ、烏瓜

日は本はイネ科の穂草の種類が多い。まさに瑞穂の国だ。中でもよく見かけるのがえのころぐさ。穂がふっさりとしたのしっぽのようだから狗尾草とも書く。つまり犬ころ草なのだ。別名は「猫じゃらし」。誰がつけたのか、どっちの名も可愛らしい。

猫じゃらしにつよく反応せし頃のきみをおもへり十年が過ぐ

小池光「山鳩集」

「猫をおもへり」では無粋で「きみをおもへり」と相聞のように言って「つよく反応せし」に笑える。猫はじゃれるというけれど、動くものに否応なく反応してしまうだけなのだ。十年経った今は猫じゃらしに関心も示さない。きみは老いた。

たちの美しさを感じさせる。えのころぐさは若いみどりの穂もいいが、秋の茶ばんだ垂穂の情景もいものだ。

◇◇◇

烏

瓜も「カラス」と動物名がついている。カラスは黒いのに、この真っ赤な実が何で、と不思議に思うが、カラスも食べない食べ残しの実、ということと名づけられたという。ずいぶんややこしい。ところで烏瓜は花も独特の幻想的な美しさだ。かつて夕闇の路地で、廃屋の石塀いちめんの烏瓜の花を見たのが忘れられない。

からすうりの花ごぞんぢかはなびらの先いとくづのごとくに縮る

林安「山上有木」

烏瓜の花を見た人は「ごぞんぢか」と言いたくなる。昼間咲いていないこともあって、花は知らない人が案外多いらしい。「いとくづのごとくに縮る」は、ごく即物的で、とくに美しい表現をしてないのがおもしろい。これはまだ糸が広がる前の状態だろう。



烏瓜

えのころを見るたびに摘むをみなごの父なれば手にゑのころ五本

真中朋久「エウラキロン」

子供はほんとに「見るたびに摘む」。きりが無いのに一本ではやめない。持つのがめんどうだから渡してくる。渡されると捨てられない。こんなものを手にしつかり持っているのは「父なれば」こそ。父であることを意識させられるひとときだ。

ねこじやらしの茎きわやかにうきて見ゆ垂穂にあかき夕光および

玉井清弘「風箏」

ずっと伸びた細い茎にたわむ垂穂。そこにあかく夕光がさしている。ここではくつきり浮いた茎に焦点を当てて、全体のか

烏瓜の花が朝方に衰へこし打ちひらきたる花のへりより

森岡貞香「百乳文」

烏瓜の花は朝方には萎んでいく。打ち開いたときの花でなく衰えてくる花を詠んで、そこに過ぎた夜の時間をそこはかとなく感じさせる。「花のへりより」が美しい。

天狗風どつと来る夜の烏瓜ちぎるるばかり真つ赤なりける

馬場あき子「阿古父」

天狗が団扇をふったような突風を「天狗風」という。ちぎれるように烏瓜の実が揺れる。「ちぎるるばかり真つ赤」と約めて、鮮明に赤が迫ってくる。夜のどこで見たのだろう。天狗の顔の赤、また「烏天狗」のイメージも連れてくる。

からすうりだけが塗りつぶされており雑木林の冬の側面

内山晶太「外出」五号・二〇二一年

冬にいつまでも残っているのが烏瓜の実。烏瓜の蔓も葉も枯れ果てている。デッサン画に烏瓜だけが塗りつぶされているよう。その鮮やかな色に、空間が側面になった感覚がリアルだ。



八っ手

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第七回 八っ手で、
ななかまど

高 村光太郎の詩「冬が来た」は「きつぱりと冬が来た／八
つ手の白い花も消え／公孫樹の木も帯になった」と始ま
る。教科書に載っていて暗唱もさせられた。でも八っ手の花が
終わると冬だという季節感には気づいていなかった。八っ手は
どこにでもあり生家にも生えていたのに。

窓の外に白き八っ手の花咲きてこころ寂しき冬
は来にけり

島本赤彦「氷魚」(大正六年)

塀の上の八っ手の花の青白く光つめたき冬さり
にけり

古泉千樫「青牛集」(大正十四年)

二首とも八っ手の花が咲いて冬が来たと詠む。花が終わって

冬が来た、という光太郎の詩と「冬」の到来の感覚が違うのが
おもしろい。十一月ごろ咲き始める八っ手だが晩秋か初冬か、
その感じ方はさまざまだ。山茶花がこの時期の季節感としてよ
く詠まれるけれど、八っ手もそうなのだと改めて思った。
光太郎の詩が「冬よ 僕に來い」と立ち向かう気まんまんな
のに、「こころ寂しき冬」「光つめたき冬」と嘆きがちなのは、
詩と短歌の違いでもあろうか。千樫の「青白く」は緑がかった
白のことだろう。詩も短歌も大正時代の作である。

毬と群れし八っ手の花を支へつつ青みくるまで
硬き空気よ

初井しづ枝「藍の紋」

いかにも初冬の「青みくるまで硬き空気」。その空気の硬さ

が大きな八っ手の毬の花を支えている、という感覚がすばらし
い。「毬」との「と」に動きがあつて、群れつつも空気に支え
られて静止している感じが伝わってくる。

裏庭の八っ手の下に前肢で顔かくしつつか猫が寝
てをり

栗木京子「ランプの精」

ふだんの八っ手はただの大きな葉っぱ。その下で猫が寝てい
る。前肢で顔を隠すいつものスタイルは八っ手の下でも。この
情景には、どこにでも見かける八っ手ならではの味わいがある。

◆◆◆

秋 から冬へさまざまな木の実が鮮やかに彩る。ここでは全国
的な木ではないが「ななかまど」(七竈)の歌をあげてみ
たい。北国の街路樹も風物詩だ。とにかくぎっしり赤く美しい。

秋天にナナカマドの実のひとつからまたひとつ
湧き風に揺れいる

江戸雪「空白」

揺れながら「ひとつからまたひとつ湧き」にななかまどの感
じがある。「湧き」という動詞がとてもいい。かぎりなく湧い
ていく赤。見ているとどこか不安になってくるようでもある。

ななかまど揺るる盛岡材木町赤き実食うべ秋の
鳥たつ

梅内美華子「火太郎」

盛岡材木町は路上販売で賑わう商店街らしい。でもそんな
街のようすは捨象されて、ななかまどと鳥の動きだけ。「赤き
実食うべ」も絵本のように。すっきりした一首に東北の地名が地
名としてのみ生きる。一首のつくる空間がここにある。

酔い深きわが礼すればななかまど赤き心を捧げ
立つたり

佐佐木幸綱「瀧の時間」

雨音の寒き夜の更ななかまど濡れつつ縄文の朱
深むらん

同

津軽での歌。酔いの深さにななかまどに向かって礼する。
「赤き心」というと「赤心」。真心、偽らない心だ。それを捧げ
る赤さでななかまどは立っているという。みちのくを旅して、
その心に触れたような思いがある。二首目の「縄文の朱」にも
北国へのロマンの心情がある。ななかまどの実が鮮烈に深く何
かを呼び覚ますのだろう。



ななかまど



南天

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかし

第八回 南天、枇杷の花

南 天は白い花房がとても淨らかで、細かい葉とともに揺れるのが何とも言えない風情だが、真っ赤な実も淨らかだ。ここでは実の時期をとりあげてみたい。「なんてん」の音から「難転」つまり難を転じるといいうので植える家が多かったらしい。いつもそばに寄り添っている木である。

一度だけ本当の恋がありまして南天の実が知っております

山崎方代「こころぎ」

南天で思い浮かぶのがこの歌。他の実でなく「南天」がびつたりくる。どこかひっそりと繊細な南天の木。その赤い実はただ一度の「本当の恋」を見ているのにふさわしい。南天の実だけが知っている、でなく、南天の実が知ってくれてくれる、なの

だ。方代独特の口調が、この物語に生きている。

食べずともずる生きてゆきさうなこの身
南天いつまで紅い

今野寿美「め・じ・か」

「この身」が「この実」と掛けられている。小食の人のだろう。小食でもあまり支障もないので何となく「食べずともずる生きていきそうだ」と思う。南天の実はいつまで紅いんだろう、この私も、という感じだろうか。「ずるずる」がおかしく、軽い詠み口がおもしろい。

をとうとの雪のうさぎにまなこつくと南天とり
し岡崎の庭

与謝野鉄幹「紫」(明治三十四年刊)

南天の実といえば雪うさぎの眼。雪のころにもまだまだ赤いのだ。「をとうとの雪のうさぎ」に眼をつけてやろうと南天の実をとっている、その思い出を歌にする鉄幹が微笑ましい。弟は三歳下で、とても仲良く遊んでいたようである。南天はなつかしい記憶のなかに息づいているのだ。「をとうと」とあるが、旧かなでも「おとうと」

◇◇◇

冬 に花の咲く木は枇杷くらいだろう。めずらしいのだが目立たない花なので、気づかないことも多い。あまりの地味さに、逆に心寄せする人もいる。独特の花である。

苦しみて生きつつをれば枇杷の花終りて冬の後半となる

佐藤佐太郎「帰潮」

「帰潮」の巻頭歌で有名だ。初句の心境から、枇杷の花を歌うのかと思うと「終りて冬の後半となる」と淡々と終わる。「冬の後半」という言い方は散文的で歌で見たことがない。枇杷は初冬に咲いて目立たないままかなり長くあるが、それも終わると冬もやっと後半。春も近い、という思いか、いよいよ厳寒の

時期に入るといふ思いか、その両方なのだろう。枇杷の花の終わるときまで見届けている心境は、初句と重なってくるのである。

おもひなく見てみし枇杷の白き花陽あたる花に
蜂はあつまる

石川不二子「牧歌」

「おもひなく」とあえて言われると何か思いがあるような気がするから不思議である。冬の枇杷の花にはミツバチがたくさん来る。地味な枇杷の花でも「陽あたる花に蜂はあつまる」のだ、という「おもひ」があったかもしれない。

灰色の苞よりいでて枇杷咲きぬすでに素枯れし
もののごとくに

大辻隆弘「景徳鎮」

枇杷の花が目立たないのは、この灰色の苞の毛に包まれているからだ。もやもやしている。枇杷の花の形態がまざまざと見えてくる歌である。同時に、すでに素枯れたもののようにつく、というところに何か深い意味を感じる。どこか精神性が感じられるのが枇杷の花の歌だ。

枇杷の花



なずな

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第九回 なずな、
母子草

新年にちなんだ七草粥に入れる春の七草から取り上げてみたい。芹・なずな・御形・はこべら・ほとけのざ・すずな・すずしろ春の七草である。この中から野菜は除いて野草ということで、まずは「なずな」から。

鎌倉の山あひひ日だまり冬ぬくみ摘むにゆたけき
七草なづな
木下利玄「みかんの木」

なづななづな切抜き模様を地に敷きてまだき春
ありここのところにて
同

山あいに七草のなずなを見つけてとてもうれしそうだ。童謡のような口調に弾む気持ちがいきいき。二首目の「切抜き模

暮れはじめたる草叢に星のごとペンペン草は実
を浮かべをり
横山未来子「金の雨」

なずなは「ペンペン草」という名で親しまれている。茎が小さな撥のようなかたちの実を突き出して、振るとペンペンと鳴りそうだから。でも、この名ゆえに取るに足らない草という感じにもなっている。それを「星のごと」と美しく詠んでペンペン草をいつくしむようだ。「実を浮かべ」が素敵。

美しいものを静かに拒みつつペンペン草を踏んでゆく土手
大森静佳「てのひらを燃やす」

美しいものを拒みながら、とくに美しいものでもないペンペン草を踏んでゆく。そのねじれの意識に魅力のある歌。これも「ペンペン草」という名が効いているのだろう。

春の七草の「御形」は一般的には「母子草」の名で知られる。淡い黄のもこもこした花だ。もともとは冠毛のほけ立つ「ホホコグサ」が「ハハコグサ」になったと草木辞典にある。音から転じて「母子草」になったら大切に眺められる草になった。名前はいくつも重要なのだ。「老いて尚なつかしき名の母子草」(高浜虚子)という句もある。

母子草の貧困の黄は見えてをり還らぬことはあ
きらめんとす
滝沢亘「断腸歌集」

滝沢亘は戦後の結核療養者歌人である。癒えることなく亡くなった。母子草の何となく貧しげな黄の色を「貧困の黄」と

いつて、母と自分の境涯に重ねているのだろう。自分の人生の失意、あきらめが母子草の黄に滲む。
道の辺にひっそり点る母子草、母すこやかなころわが目のゆかず
十鳥敏夫「晨光」
信心の篤きははその母子草かがめわれの影のなかに咲く
同

「母子草」という連作十四首の中の歌。母上は認知症らしく、その母への思いを母子草に託して詠んでいる。母がすこやかだったころは目を止めることもなかった花なのに、今は心惹かれてならないのだ。二首目の「われの影のなかに咲く」は実景でありつつ、母というものの在りようを感じさせている。

母子草黄のつつましき花の色わた毛やさしき草
にちかづく
一ノ関忠人「木ノ葉揺落」

「つつましき」「やさしき」とやはり母に重ねていよう。男性の方が「母子草」に寄せる歌が多いような気がする。



母子草



はこべ（はこべら）

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第十回 はこべ（はこべら）、いぬふぐり

「小」諸なる古城のほとり 雲白く遊子悲しむ 緑なす
繁縷は萌えず」と島崎藤村「千曲川旅情の歌」にう
たわれる繁縷。今はまだ萌えていないのだが繁縷の緑なすさま
が目映ってくる。いかにもやわらかく地に生う春のみどり
だ。

はこべ草踏み通れば青臭しかなしき春のにはほ
ひなるかも

若山喜志子「筑摩野」

はこべらははかなき草よ春もややととのふ頃に
実をこぼすなり

土に低くもやもと萌え出でているはこべを踏んでいく。草

ふきのたう、つくし、はこべら春の菜の人触れ
ざればいよよさみどり

高木佳子「青雨記」

東日本大震災の翌年二〇一二年の福島春の歌である。「人触
れざれば」は放射線量の故だ。誰も摘めない菜の「いよよさみ
どり」が無惨に目に沁みる。「はこべら」を最後に「菜」とし
て入れていることで、この年の春のさみどりが一層印象に強い。

◇◇◇

春

の七草の「はこべ」の次は「ほとけのざ」なのだが、こ
れは黄の「たびらこ」のこと。いわゆる「ほとけのざ」
のピンクの花ではない。「たびらこ」の歌はあまりないのでバ
スして、ここでは「いぬふぐり」を取り上げることにした。

「いぬふぐり」は実が犬の陰囊に似ているから付けられたとい
うが、こんなに可愛い花にあんなりな命名ではないか。

夕づける風冷えそめぬみちばたの空いろ小花み
なみなつぽむ

木下利玄「紅玉」

「空いろ小花」はあきらかに「いぬふぐり」。名前が名前なの

シンプルな花だと思うはこべらの五枚の白い花
びらそろいて

前田康子「キノエノコロ」

はこべの花びらは十枚に見えるが実は五枚。文字で「五枚
の」と言われるとイメージが違ふ感じがするが正確なのだ。輪
郭のすっきりした、まさに「シンプルな花」で美しい。

「はこべ」は古くは「はこべら」である。

で、こういう歌い方もある。季節感からすぐわかる花だ。

夕方になるとつぽむ。「みなみなつぽむ」が可愛らしい。

くだり来て大いぬふぐり花咲くを雪消の坂に見
るもきさらぎ

前登志夫「樹下集」

現在親しまれている青い花は古来種ではなく、正確には外来
種の「大いぬふぐり」（オオイヌノフグリ）である。きさらぎ
の雪消の坂に、いちちはやく咲く青い花がうれしい。

あらくさを払い見つけし犬ふぐりひかり届かぬ
土に息づく

小高賢「家長」

春の道、にわかに暗く見下ろせば犬ふぐりは底
より咲けり

花山周子「屋上の人屋上の鳥」

「ひかり届かぬ土」や暗い道の底に犬ふぐりの花を見つける。
「土に息づく」「底より咲けり」と地にじかに在る四つの淡い青
い花びら。その真中は白く、胸に明るさをもしてくる花
だ。



いぬふぐり



れんげ

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第十一回 れんげ、ムラサキハナナ（諸葛菜）

一面のれんげ畑をかつてはよく見かけたが、いつからかあまり見なくなった。土の肥料や牧草用に田に植えていた時代が過ぎてしまったのだ。美しい春の風物詩だったのに。

げんげんの花原めぐるいくすぢの水遠くあふ夕映も見ゆ
島木赤彦「馬鈴薯の花」

れんげは地方によって「げんげ」「げんげん」ともいう。夕映えの花原の色、そこをめぐる「いくすぢの水」が遠くに一つに合うという構図の美が極まっている。明治四十二年の歌である。地でありしれんげ畑のむらさきの色ひろがれるけふの夕空
伊藤一彦「微笑の空」

「れんげ畑のむらさきの色」は比喩なのだが、地上のれんげ畑がそのまま空に移動したような、夕空のなつかしさを感じさせる。れんげ（げんげ）は漢字で「紫雲英」と書くことも思う。「地にありし」とあるから昼はれんげ畑を見たのだろう。こなごなのひとの魂ほどれんげさうどこにも咲けるふるさととなりき
永井陽子「樟の木の下」

れんげ草は、ふるさとのどこにでも咲いていた。「こなごなのひとの魂ほど」という比喩が、何か傷ましくも感じられる。

花の「一つ一つ」でなく「こなごなの」。そう表現したのはなぜだろう。二首目は母の亡くなったときの歌。お母さん、彼岸にもれんげが咲いているといいね。「蓮華」とも読まれそうな歌だが春のれんげ草である。

れんげ草は永井陽子の花、と思えるほど多く詠んでいる。

春に群がって咲くむらさき花菜もなつかしい花だ。私は「むらさき大根」と憶えていたのだが、呼び名はいろいろ。「花だいこん」とか中国名で「諸葛菜」とか。この花は戦後に、とくに東京近辺に広がったらしい。案外に新しいのだ。

あかねさす武蔵の野べの片明かり花だいこんのむらさきの花
石田比呂志「蟬聲集」

武蔵の野べに花だいこんはよく似合う。昔から咲いていたわけでもないのに昔からあるようななつかしさ。「あかねさす」は「日」や「昼」そして「紫」にもかかる枕詞。「あかねさす紫野ゆき」と口ずさみたくなるが、その「野」と「紫」が、この歌を引き出しているように思える。

日陰ればいろ沈みゆく諸葛菜路傍のめだたぬむらさきとして
詩田さくら子「天地眼」

諸葛菜咲くみちに消ゆ額の痣はちて前髪さげもし少女
同

ここでは「諸葛菜」と詠まれる。陽ざしには明るいむらさきだが、日が翳ると色が沈んでいく。その翳りに、少女のころの自分を思い出す。前髪で隠した額の痣を。作者は東京生まれだが、少女のころにはすでに咲いていただろうか。今咲いている花が記憶をつくり出しているような気がする。今の諸葛菜の道に昔の少女が現れて消える。

なあ父さん、むらさき花菜が咲いてゐる。話しかけてはまたひとり行く
柳宣宏「施無衣」

これも亡き父への呼びかけだ。父が好きな花だったか。それはわからないが、ほんやりと呼びかけたくなるむらさきの花。なつかしさの記憶を呼ぶ花なのだろう。



ムラサキハナナ（諸葛菜）



すみれ

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第十二回 すみれ、虎杖

す

みれは『万葉集』に「春の野にすみれ摘みにと来し我そ野をなつかしき一夜寝にける」(山部赤人)と詠まれ、「山路きて何やらゆかしすみれ草」と松尾芭蕉の句にもあり、古来から愛されてきた花だが、明治の「明星」は星葉派と言われたようにしやれたロマンティックな花でもある。小さいながら咲くそのすがたの気品は格別だ。

この塚のぬしを語るな名を問ふただすみれぐさひとむら植ゑませ

山川登美子「恋衣」

その「明星」の登美子の歌。与謝野晶子とは違ってひっそりとした歌の佇まいが「すみれ」にふさわしい。これは白いすみれのイメージではなからうか。明治三十三年ごろの歌。

玉づさの君の使は紫の堇の花を持ちて来しかも

正岡子規「竹乃里歌」

やみてあれば庭さへ見ぬを花堇我が手にとりて見らくうれしも

同

こちらは明治三十五年、「京の人より香堇の一束を贈り来しける」と詞書があつてすみれの歌が十二首ある。亡くなる年の春の歌である。小包で来たのだが「玉づさの君の使」と美しく詠んで、君と堇を言祝いでいる。庭も見られなくなった子規はどんなにうれしかったか。「香堇」は外来種だが「たちつばすみれ」に似た紫の濃い花。今はそのへんでよく見かける。

今見てし曼茶羅図絵が眼の底にきらめて野のすみれ花濃し

前川佐美雄「搜神」

「きらめて」は「きらめきて」の誤植だろう。「曼茶羅図絵」の極彩色と、野のすみれの濃い紫。脳内と野の空間が重なる。すみれの歌としては異色で印象に強い。

つぶやきで世界を埋める埋められぬ場所に小さく堇が咲いて

原田彩加「黄色いボート」

この現代の歌も登美子の歌と通じる堇のイメージがある。この場所には堇だけあれ、というような希いの花なのだ。

虎

虎は丈高く群生する強靱な野草だが、短歌には案外多く詠まれている。この漢字は茎の編々が虎に似ているかららしい。花は夏だが、若い茎を食すので春の季語になっている。

虎杖のわかきをひと夜塩につけてあくる朝食ふ熱き飯にそへ

若山牧水「くろ土」



虎杖

水つぼき山虎杖の茎の青さおのづからにもたべたくぞなる

前田夕暮「原生林」

いかにもおいしそう。実は私はまだ食べたことがなく、ぜひ食べてみようと思った。牧水の歌はそのままレシピである。夕暮の歌も、茎を見ただけで食欲をそそられているのだ。

虎杖のほひを口に感じあつ雪のなか不意にあくがれながら

石川不二子「牧歌」

これも食べるときの感覚だろう。その匂いは酸のさわやかさか。虎杖は春の味と匂いなのだ。雪のなかにそれをあこがれる。

しろじろと虎杖の咲く崖が見え幸のなき曇につく

佐藤佐太郎「帰潮」

花の季節の歌も一首。虎杖は荒れた崖などによく根がはっている。花のほんやりした白さと、曇り空の白さがひと続きになっている。「幸のなき曇」はさながら、佐太郎の内面空間が風景になったように独特のふんいきがある。



しろつめぐさ

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかし

第十三回 しろつめぐさ(クローバー)、茅花

しろつめぐさ(しろつめくさ・クローバー)は一面に白く咲く。緑の濃いかたちのいい三つ葉。「四つ葉のクローバー」は幸せのシンボルだし、花はかんむりや首飾りを編んだりと愛される草だ。

童女が編みしろつめぐさのレイかけて旅立つごとくわれは手を振る

齋藤史「ひたくれなゐ」

クローバーの丘に少女は連れゆきて犬にも首輪を編みやりしとぞ

大西民子「光たばねて」

女の子はしろつめぐさを見れば花を編む。時間を忘れて。齋藤史の歌は、編んだレイをもらって「旅立つごとく」と甘やか

な気分になって手を振る。大西民子の歌は牧場を訪れたときのもの。牧草であるクローバーの丘。そこでの少女と犬の情景が目につく。レイも首輪も、そこに流れていた幸せな時間の象徴なのだ。

茎ながくクローバーの葉の繁りたりそこに寝そべるのが犬は好き

なみの重子「ロフ」と言うとき

クローバーの葉はやわらかい。だから牧草にもなるし、梱包の詰めものとしても利用された。「白詰草」の名前はそこから来ているらしい。このやわらかい葉に寝そべるのは犬の幸せ。犬の心地良さを感じて人もハッピーになる。「寝そべる」にいかにも大きな犬の感じがある。

芝生にも白詰草が咲くことがあるよ言いたいことを言いなよ

土岐友浩「僕は行くよ」

芝生にはよく振花とか庭石菖が生えるが、これらは一本一本の花。群生の白詰草が芝生に咲くことがある、ということにどこか自分の群れから離れて咲く感じがある。下句でのさりげない励ましが微妙につながっているようだ。

茅 花というのは茅の花穂のことなので「茅」が植物名だが「茅花」で詠まれることが多い。初夏の真っ白なやわらかい穂のなびく美しさは何ともいえない。さわりごちも。

泣くときは瞼に当てる手のごとく茅花や撓むこのあめのふるに

長塚節「長塚節歌集」

泣くときに瞼に当てる手のように茅花は撓んでいるだろうか、「このあめのふる」中で、という。男性(女性でも)に珍

しい見立ての歌だ。濡れて細くなった穂を思いやっている繊細さ。大正三(一九一四)年、亡くなる前年の歌である。しらじらと茅花ほけ立つ草野原夕日あかるく風わたるなり

古泉千穂「屋上の土」

まさに茅花の草野原の景色。「ほけ立つ」は「蓬け立つ」で、もう葉が飛んでいく頃の茅花だろう。白がほわっと広がって、夕日があかるく照らしている。風がわたってゆく。牛を牽きに行くときの歌で大正六(一九一七)年作。

つばなの野あまりあかるく光るゆるこの世の伴侶はだれにてもよし

日高堯子「野の扉」

前の歌と同様に、茅花の風景は「あまりあかるく光る」のである。そこに付けた心情が「この世の伴侶はだれにてもよし」なのがおもしろい。何もかもどうでもよくなる陶酔感に浸っているのだ。この世の伴侶がだれなんてことは、野のあかるさの前では無化されてしまう。これが「すすき」であれば何か捨て鉢感になるが「つばな」だからこそその肯定感にあふれる。



茅花



しやが

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第十四回 しやが、
ほたるぶくろ

しやがは暗がりにほおつと白く群がって咲いている。海岸の木立の陰とか、山の藪の陰とか。そのへんにもよく咲いているが目立たず何となく日陰の花という印象だ。アヤメ科だけど、アヤメの晴れがましさと対照的な地味さである。漢字では「著我」「胡蝶花」「射干」といろいろ書く。「射干」は檜扇という別の花もこの漢字を当てるので紛らわしい。

たぎちくだる流いよいよ音まさり道せばまりて
胡蝶花の花多し

佐佐木信綱「秋の声」

流れの音が大きくなってくるにしたがって道がせばまる。その道に続く胡蝶花。その場において共に歩いているような気がしてくる歌。胡蝶花という漢字のせいかなこの花も明るく感じられ

る。咲く場所を明示する歌が男性歌人に多いようだ。

血のうすき感じに著我の花咲けり今朝はまとへ
るコートが重し

大西民子「花澄れあき」

「血のうすき感じに」がいかに著我の花を言い得て妙だ。コートを着る時期だろうか、と思ったが梅雨寒でのジャケットくらいかもしれない。今朝のなんとなくコートを重く感じる体調と著我の花はほんやりと重なっているのである。

雨のなか著我花むらに近づけば淡く紫暈をまと
ひをりたり

雨宮雅子「秘法」

白っぽいだけに見える著我の花は、よく見ると紫やオレンジ

色の模様がふしぎに複雑で面白い。この歌は雨に濡れて紫が浮き出してきた印象を「淡く紫暈をまとひ」と詠んで、この地味な花の美の発見がある。

◇◇◇

ほたるぶくろも梅雨時にひっそりと咲く。この花を好きな人は多い。淡い紫にうつむくかたちは風情がある。目立たないようでいて目立っているタイプの花だ。「ほたるぶくろ」という名前は、子供が中に螢を入れて遊ぶとか、形が提灯に似ているから「火垂る」だとかの説があつて、名前からも愛されるのだから。

野のみちのほたるぶくろに螢火のともると思う
長き夕映え

武川忠一「秋照」

日がなかなか落ちない時期。夕映えにじつくり照らされているうちに螢ぶくろの花に火がともるような気がしてくる。ほたるぶくろだから、それは螢火。夜になれば光るかもしれない。子供のころをなつかしむような情感がある。

螢ぶくろのふくろのひとつに灯がともり野戦病
院に父生き返る

中野昭子「螢ぶくろ」

これも螢ぶくろに灯のともる歌。この灯は命の灯である。父は戦時中に負傷して野戦病院にいたことがあるのだろう。そこで生還したときを、螢ぶくろに象徴させて詠んでいる。群れ咲く螢ぶくろの一つに灯がともるように、父は生き返ったのだと。ふしぎな歌のようで、どこか人々に共通するなつかしい感覚の歌である。

高野川、川のほとりに道生れてほたるぶくろの
花膨れおり

吉川宏志「夜光」

京都の高野川。道でもない川のほとりを歩いていたら、あるところから道になっている。そこにはほたるぶくろの花が。「膨れおり」に、この花にちよつと気圧されるような感覚がある。膨らみ方のラインには、内側から何かが膨らましているような、もの暗さがあるのだ。「道生れて」という表現から「膨れおり」に続く流れが、うまくその感覚を引き出している。



ほたるぶくろ



かたばみ

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかし

第十五回 かたばみ、昼顔

さいきんは栽培種の紫色（ピンクがかった）のかたばみも多く見かける。丈が高く花も大きめではなやかだ。でも、古

来の黄の小さい花の野生種こそ「かたばみ」とひいきしてしまおう。葉の形がいいのでよく家紋の図案になっている。「枕草子」にも「かたばみ、綾の紋にてあるも、こと物よりはをかし」とあって、綾織物の紋様にも用いられていたようだ。

かたばみの蜜を吸ひ終へほのかにも黄の色を曳き蛭蝶発つ

岡部史「海の琥珀」

かたばみに蛭蝶が来ているのをよく見かける。蛭蝶の幼虫はかたばみ草に生まれて育つことが多いということを知った。蛭蝶は淡い灰色だが「黄の色を曳き」という表現に、かたばみか

ら発つことに心を残すような余韻がある。

カタバミの花にとどまる雨の露 祈ればなにか失われゆく

小島なお「展開図」

カタバミの花は雨のときは閉じている。この歌は雨上がりで陽がさして開いた花だろう。私はかつて「小国の祈りの如く花閉じて黄のかたばみの朝のしずけさ」（歌集「草舟」という歌をつくったが「祈ればなにか失われゆく」が続きのようになにに沁み込んでいる。どこか箴言的なフレーズだ。

石垣に実り合ひたるかたばみのはじける音はかたばみが聴く

内山品太「詩客」二〇一二年十二月

かたばみの実は勢いよく弾ける。音は聞いたことがないけれど。「実り合ひたる」が何か仲間どうしのように、お互いに弾ける音を聴き合っているような、ささやかな世界がここにある。石垣の隙間の世界だ。

◇◇◇

朝顔、夕顔と違って昼顔だけはいつまでも野生の花である。夏の陽ざしに、草や棚にからんで淡くほんやりと咲いていて、どこか儚い。このごろの昼顔はピンクが濃くて、あの昔の記憶のほのかな色の花ではないような気がする。

腕いまだ灼けざる夏よひるがほは昼月のごとく透きつつ咲きて

河野裕子「ひるがほ」

くつきりと折目ただしく蕾みあるひるがほのやうな日傘をひらく

同「体力」

昼顔はまさに昼の月のほの白さに薄く咲く。まだ灼けていない腕の白さと重ねたようなナルシズムがほのかに匂う。

野生の蔓のたくましさと、透くような花のはかなさ、若き河

野裕子は自己投影するように昼顔を多く詠んでいる。

二首目は日傘の比喩だけれど、昼顔の蕾の畳み方が見事にとらえられている。日傘をひらくとき、ひらく昼顔がイメージされる。折目をほどこいてゆく昼顔。中年になって詠みかたも対象に添ってきているようだ。

悲しみて旅ゆく汽車の窓に見しひとつの夢や晝顔の花

前川佐美雄「天平雲」

昭和十六年、戦争の迫る時代の歌。車窓に見る昼顔の花を「ひとつの夢や」とうたう。うすれてほんやりとした夢。去った若き日や時代へのかなしみ、喪失感が透む。

肺尖にひとつつ昼顔の花燃ゆと告げんとしつたわむ言葉は

岡井隆「朝狩」

レントゲンで肺尖に見つけた白い影を昼顔にたとえている。ここに昼顔！と思ってしまうが、患者に告げようとして言葉にためらう心理の機微も、この比喩から巧みに引き出されてくる。

昼顔の淡い花に人はさまざまに思いを投影するのだろう。



草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第十六回 竹煮草、菊芋
たけにぐさ きくいも

野 草の中で一際大きくて目立つ竹煮草。茎が空なのが竹に似るといので「竹似草」とも書く。竹といっしょに煮たから「竹煮草」という説があるが、よくはわからないようだ。短歌や俳句ではほとんど「竹煮草」で登場している。

竹煮ぐさしらじら白き日を翻す異變といふはかくしづけきか

葛原妙子『橙黄』

竹煮草の葉は大きく葉の裏は白い。「しらじら白き」は葉なのだが「日」にかかって、異変の日を印象づける。敗戦の夏の歌である。ふいに戦争の音も途絶えた静けさを、音もなく翻る竹煮草の葉に感じているのだ。竹煮草と異変、この二つの言葉が強いインパクトをもって迫ってくる。

敵にはなり得ない、という気持ちはどんな時だろう。「われか竹煮草」と畳みかける勢いのまま「朱の汁あふれてきたり」に野性的な発露がある。若さのくやしさがどこかみずみずしい。猛々しい竹煮草は魅力的な歌を呼びよせている。

◇ ◇ ◇

ひ まわりを小さくしたような菊芋の花は遠目にもあざやかで、元氣そうで私は好きだ。花は菊のようで、芋のような塊茎が出来るというので「菊芋」。なんとというセンスのない雑な命名だろう。この塊茎を戦中戦後には芋の代わりに食べたらしい。菊芋の球茎食ひたるその味を忘れしや人はみな口噤む

北沢郁子『マティスの窓辺』

あげつらふ力もなければ菊芋の花に敗戦のかの日を偲ぶ

同『神の木陰』

菊芋の球茎の味について「人はみな口噤む」という。まずかつたらしく、当時の食糧難の苦しさを思い出したくもないということだろう。「忘れしや」には、忘れてはいない、というニュア



しらしらと花持ちそめし竹煮草太宰治入りし上水の徑

宮柊二『忘瓦亭の歌』

こちらの「しらしら」は花。丈高い竹煮草のてっぺんに白い細かい花が吹き上げるように咲いて印象的である。太宰治が入水自殺をした玉川上水に沿う径に竹煮草の花。私の生家もこの近くだったので、ありありと思ひ浮かべる。いかにも竹煮草がぴったりの場所であった。

君の敵にはなり得ぬわれか竹煮草刈れば朱の汁あふれてきたり

梅内美華子『若月祭』

竹煮草の茎を切ると黄赤色の汁が出る。これは有毒だ。君の

ンスが滲む。菊芋の花は敗戦の夏にはいっぱい咲いていたにちがない。作者にとつては菊芋は敗戦のかの日の花なのだ。

菊芋はいま健康志向で復活しつつありサブリなどもある。時代の移り変わりを感ぜさせる。

大橋を出勤人の行くしげしきらめき遠くキクイモの花

林安一『刻文の魚』

橋をわたる出勤の人の群れ。その向こうに見える菊芋の花。風景の構図として親しみがあるとともに、「遠くきらめく」でなく「きらめき遠く」に、時間を隔てたような感じが生まれている。実際だが、まぼろしのきらめきのような。

菊芋の花が目に残まる江戸末期ころの地蔵の背後にありて

外塚喬『鳴禽』

「江戸末期ころの地蔵」という記述がおもしろい。菊芋も江戸末期ごろに渡来した植物らしい。そこに興味をおぼえたのだろうか。「目に留まる」という言い方も独特で、どこか文人画ふうな味わいを持つ歌である。鄙びた菊芋の花はなつかしい。



木犀

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第十七回 木犀、珊瑚樹

木の香に秋を感じるという人は多い。風に乗ってくるあの甘い香り。でも、この香が強すぎると思う人も多いようだ。私もその一人。というのも最近、この木は住宅街によく植えられていて、むせかえるように匂うからだ。

朝の日に黄金細葎香を吐きて秋に驕りの木犀の花

尾上柴舟「銀鈴」

明治の歌でも「香を吐きて」「驕りの木犀の花」とやや鬱陶しく感じている風情でもある。でもそこに魅惑も感じているのだ。「黄金細葎」はいかにも明治らしいハイカラな言葉のつながり。「細葎」とあるが、あの小さな花の蕊は細いのだろうか。判然としないが美しい。

木犀の香る木かげにたちどまりバセティックな樹とひとのつぶやく 山田富士郎「アビーロードを夢みて」

「バセティック」は悲愴的とか感動的、哀れをさそうなどの意味がある。曲やドラマの形容によく使われるが「樹」の形容なのは珍しい。これも香りのもたらす強い作用に、胸をやるせなくしめつけられる樹という感じではないだろうか。

そこだけは人の歩みを輝かせきんもくせいの花 踏まれゆく 安藤美保「水の粒子」

こちらは散ったきんもくせいの小花。「人の歩みを輝かせ」と金木犀の花を主語にして、踏まれる花へのオマージュが美しい。

い。「そこだけは」という強調が、金の花の散らばる空間を特別なものになっている。安藤美保は二十四歳で事故で亡くなった。素直で瑞々しい感受性は今も輝いている。

◇◇◇

珊瑚 珊瑚樹の生垣はよくそのへんにあつて、家のすぐ横もそう

なのだが、葉っぱはいつも虫に喰われてぼろぼろ。艶やかに光る葉は虫にとって美味しいのだろう。生垣では花も実も見ることがない。やはり近くの遊歩道の本にはまさに紅珊瑚のような実が垂れる。

さんごじゆの大樹のうへを行く鴉南なぎさに低くなりつも 斎藤茂吉「あらたま」

海岸近くには珊瑚樹の大樹もあるようだ。あの緑濃い厚い葉、珊瑚のような実を垂らす大樹、憧れる。この歌はやはり三浦海岸近くの大樹。実の時期ではないようだが、南国的な葉を広げる樹の上を鴉が行く。珊瑚樹と「南なぎさに低く」という海に見える空間への動きにスケール感がある。

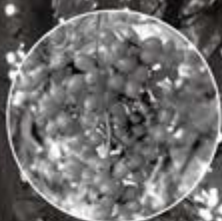
さんごじゆの実のなる垣にかこまれてあはれわたくし専ら私 岡井隆「歳月の贈物」

これは垣根の珊瑚樹にちゃんと実がついている。赤い実に囲まれての「私」のこの眩しさ。この歌のある一連は母の死への感慨を詠んだものである。この歌も茫然たるあわれな、ただ孤独な「私」だろう。珊瑚樹の実は専ら赤く、わたしは専ら私。ひたすらに悲哀が意識されている。

珊瑚樹のとびきり紅き秋なりきほんたうによいかと問はれてゐたり 今野寿美「世紀末の桃」

「ほんたうによいか」は何のことなのかは触れられていない。ただ、そう問われたのは「珊瑚樹のとびきり紅き秋」であったというだけ。でも「珊瑚樹」に華やかさがあり、まして「とびきり」の記憶なのだから想像に難くない。生涯の約束を思わせる、きらきらしい歌である。

赤い実のなる木は多いけれど「珊瑚」と実をたたえる名前をもらっているのはこの木だけ。憧れの木だったのかもしれない。



珊瑚樹



メヒシバ

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第十八回 メヒシバ、背高泡立草

ありふれた雑草の代名詞のようなメヒシバ。ひよろつと立って、ほっそりとした穂を放射状につける。見た目は他の穂草に比べて繊細で涼しげな感じだが繁殖力は強く、どこにでも生えている。

「管理地」といふ看板ありてメヒシバの埋めつくす地を雀が発てり

澤村齊美「Galley」

「管理地」という看板と、埋めつくしている「メヒシバ」が、どこかマッチしないおかしみがある。メヒシバから雀が発ていくのも、稲でもあるまいにという感じ。情景ぜんたいが管理などどこ吹く風のとほけたような味わいがある。

草くさいこれは私でないからだ 髪に絡まるメヒシバを抜く

山崎聡子「青い舌」

「草くさい」のは私のからだだけではなく髪にからまるメヒシバのせいだ。メヒシバは「女日芝」また「離日芝」と書く。女の性への違和感、うとましさや「メヒシバ」に託して詠んでパンチがきいている。

踏みひとは誰もゐないから道端のメヒシバうたふ秋の国なり

浦河奈々「サフランと釣鐘」

これもメヒシバに女性を重ねているようだ。踏み人はとりあえずここにはいない。この道端が私の国。踏み残れがちな自分を

投影した歌かもしれない。現代女性に、メヒシバに思いを託するような歌が多いことに気づいて、ちよつと発見した気分だ。

種類は違いが似ている穂の太い「オヒシバ」があつて「強きことが生くる術なりオヒシバは金色の種子を地に撒き散らす」(早川志織「種の起源」)という歌がある。こちらはいかにも「雄日芝」の歌である。

◇ ◇ ◇

背 高泡立草はアキノキリンソウとも言い、野や空き地を埋め尽くす外来種の黄の群落は大いに嫌われてきた。私も車窓に続くこの花の黄をうんざりして眺めたものである。

封建をかざりし蒔絵のすすきなど自滅してきりん草の秋ワツとひろがる

倉地与年子「乾燥期」

この「きりん草」はあきらかに背高泡立草のことである。「封建をかざりし」にはびっくりするが、日本の秋を象徴する「すすき」が、背高泡立草にとって替わられた、という思いが生に詠まれている。くやしいというよりは、きりん草の秋が小気味いいような口ぶりが面白い。昭和三十年代の歌。

植物帯に侵入しきたり威をふるひし背高泡立草も滅びゆくらし

北沢郁子「夢違」

ところが平成の初めのころには、すでに「滅びゆくらし」と詠まれている。今はかなり衰退しているのは誰の目にもあきらかだが。倉地与年子は、すすきが自滅と詠んでいるが、背高泡立草はまさに「自滅」と言われている。この植物は特殊な成分を分泌して他の植物を駆逐するが、それが自らをも滅ぼした、というのである。その説が正しいかどうかは不明だが、とにかくスキの方が強かつたらしく、今スキは復活している。

街なかのアワダチソウの空き地から昼の花火を見たような午後

永田紅「日輪」

「ような」とあるから実際でないようだが、たぶん実際だと思ふ。この何とも言えない冴えない場面がリアルすぎる。或る午後の「街なかのアワダチソウの空き地」の空気がむうつと伝わってくる。

背高泡立草の歌は戦後の時代の推移を映しだしている。



背高泡立草



石路

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかし

第十九回 石路、蛇の髭

これから冬に入るという季に、石路は黄のあざやかな花をすつくと掲げる。キク科だけれど葉は露のようでつやつやしている。「つわぶき」は「艶露」の訛りともいう。「石路」の「石」は海岸の石の間によく自生するからだとか。どこをとっても、はかないところがなく、きりつとした風情である。

秋草のしどろが端にものものしく生きを栄ゆる
つはぶきの花

それにしても「ものものしく」とは花にはめずらしい形容である。「ものものし」は落ち着いた、立派なというプラスイメージで使われているのだろう。この歌は左千夫晩年の「ほろびの光」一連の中にあり「秋草やすべて幽けき寂滅の光」の晩秋に、

伊藤左千夫「伊藤左千夫歌集」

つわぶきだけが「生きを栄ゆる」と讃えているのである。
切支丹天草勢の果しあと岩崖に黄の石路の花咲く

熊本・天草での歌。岩崖に咲く「石路」。その黄は天草一揆で果てた切支丹の人たちの信仰の意志のように輝いている。「果しあと」から時代を越えて直に石路に繋げたところが歌の強さになっている。

ゆふしぐれ過ぎたる庭につはぶきの葉は伏兵の
暗さとなりつ

「つはぶき」と「しぐれ」はよく似合う。花は咲いているのか、

竹山広「千日千夜」

もう花も過ぎたのか。夕暗がりに大きな厚い葉が重なり合って、そこは更に暗い。潜んでいる伏兵のようだ、という。どきりとさせられる。「伏兵」という比喩があまりに独特なので、つわぶきの葉を見ると、この歌が思い浮かぶようになった。

◇◇◇

蛇の髭は竜の髭ともいう。秋から冬にかけて、根元にとでも美しく光る青い珠をつける。これは実でなく種子なのだそう。外から見るとときもあるが、たいてい髭のような葉がふさふさと覆っていて見えない。葉をかき分けて発見するのはときめく。

じやのひげの瑠璃いろふかくならむ実をそこは
かとなくあけられて見ず

斎藤茂吉「寒雲」

これもきつと見えていない。その瑠璃いろがふかくなるころだなあ。なんとなくあけられていて見えていない。見ている歌でなく「見ず」というのが、かえって隠れた瑠璃いろを想像させる。この歌の少し前に「おしなべて冬さびにけり瑠璃いろの玉を求むと体がめつ」とあって、けっこう気にしている。



蛇の髭

おびくものとしもおもはねど龍の髭のかかふる
青き玉に目を遣る

森岡貞香「百乳文」

「おびく」は「誘く」と書くが、誘うというよりも、だましておびき寄せるといった感じの言葉。「おもはねど」と言いつつ、おびき寄せられるように青き玉に目を遣ってしまう。これも、その抗いがたい魅力を反語で詠んでいる。

竜の玉ふゆの玉なる瑠璃光は遠木枯をあつめて
みたり

雨宮雅子「秘法」

「竜の髭の玉」を略して「竜の玉」と詠む歌も時に見かける。たしかに「髭」が入らないほうがスッキリするかも。ドラゴンボールだ。「遠木枯をあつめて」という表現は冷たい青の玉にふさわしい。美しすぎるくらいの一音で、この玉に魅せられている気分がよくわかる。

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第二十回 がまずみ、柊

初 夏のころ山辺の道などを歩くと、低木のがまずみの白い花がかたまっていて、よく目につく。その実は秋から初冬、大きな葉っぱの陰に真っ赤にしたたり野趣に富んで美しい。がまずみの実のくれなゐを愛でつつぞこころはあそぶ森の下かげ

上田三四二「湧井」

東京清瀬の住まい近くの散歩のようである。「森の下かげ」の紅の実がいかに「がまずみ」。まだ四十代のときだが静かでオーソドックスな歌である。痛から回復してきた時期だった。みちのくに逃れて果てし幾人も見しや道べの葵蓮の紅

柏崎駿二「百たびの雪」

と。その声、ひびきを聴く「つぶら実ども」。ふしぎな交感の世界である。一首に濁音の多いひびきが強く反響する。「がまずみ」はやはり「神つ実」なのかもしれない。

◇ ◇ ◇

柊 といえはぎざぎざの尖った葉。「ひひらぎ」は古語の動詞「ひひらぐ」から来ていて、ひりひり痛むという意味。

「疼く」と書くが、これは「うずく」とも読む。つまり痛い葉っぱという意味なのだ。

ひひらぎの葉のあひだよりこぼれつつ冬のひかりの音立つるなり

本田一弘「あらがね」

柊の葉にふれてこぼれる冬のひかり。ぎざぎざの葉ゆえに、ひかりも音を立てる。「サングワツジフイヂニチ」と題する一連の中の歌である。「ひひらぎの葉」に震災の「疼きの葉」という思いが込められている。福島県作者である。

乾きたる心のふいに動きたり空間に柊の花の香かすか

尾崎左水子「春雪ふたたび」

月魄のひびき聴きゐるがまずみのつぶら実どもの青けぶるなり

伊藤一彦「海号の歌」

これはまだ青い実のとき。「月魄」は月、または月の精のこと。

作者は盛岡の人。葵蓮の実を見て、みちのくに逃れて果てた人びとに思いを寄せる。低い眼の位置にある紅の実がいかに刻印されただろう。歩き疲れて力尽きた人の眼。

「葵蓮」は中国名の漢字だが「がまずみ」の語源は不明のようだ。「神つ実」から来ているという説もある。地方で別名も多く「ソソミ」ともよく言われているとのこと。同じ歌集に、「ガマズミの赤き実またの名のソソミよき名とぞ言ひたすまじき」という歌もある。「よき名」と言ったのは師の宮柊二。

柊はモクセイ科で、白い小さな花をいっばいつけて香りがいい。初冬かすかに匂う柊の香に乾いた心がふいに動く。特定の場所などを語らず「空間に」という抽象性が生きている。心と香り、だけの世界だ。

門に挿せし柊の葉はつやつやし節日浄らの雪となりつつ

穂積忠「雪祭」

古来から節分の日に、柊の葉と鰯の頭を魔除けとして挿しておく風習がある。柊の尖り葉が鬼の目を刺すのだとか。昭和初年、伊豆の山住みでの歌。柊の葉のつやつやしと雪、いかに清々しい。

せめぎあう想いに瘦せてゆく顎の少年のころきみは柊

大森静佳「ヘクター」

「柊」という字もイメージも清冽で少年によく合う。字の意味も痛みであればなおさらに少年の心の葛藤の苦痛に重なる。痛々しく顎の瘦せて尖る少年。「きみは柊」の結句がくつきりと立つ。



柊



水仙



草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第二十一回 水仙、つくし

水仙の花期は長い。年の暮れから春先まで見かける。畑や道ばたによく咲いているので、ありふれた鄙びた花のようには思えるが、一輪挿しにすると清らかで美しい。海岸の自生地水仙となれば格別な眺めだろう。

ひと握りのひかりの束の水仙に今を確かめ崖づたひゆく
春日真木子「火中蓮」

水仙を詠む一連から。前の歌を見ると、雪がやんだばかりの海のほとりのようだ。「ひと握りのひかりの束」と水仙を詠んでうつくしい。崖づたいを歩きながら、そのひかりに今を確かめる。実景だけれど、人生の或る時期の心境が重ねられた歌になっている。

少年は少年とねむるうす青き水仙の葉のごとく並びて
葛原妙子「原牛」

水仙の花というと、ギリシャ神話の泉に映った自分に恋をしてついにそのままナルシス（水仙）になってしまった少年を思う。この歌は花でなく青い尖った葉だが、やはり神話のイメージを曳いているだろう。清冽でどこか痛々しい。

戸籍簿も家も流されたる遺体安置されをり水仙添へて
栗本京子「水仙の章」

東日本大震災の被災地の歌。三月も東北はあちこち水仙が咲き、棺にも供えられていた。「折りそのものような水仙の花」

と作者は「あとがき」に記している。阪神淡路大震災も一月でやはり水仙が供えられたという歌が詠まれた。なぜか、どちらも水仙の花の季節だったのである。多くの人に水仙は「折りの花」として刻まれることになった。

◇ ◇ ◇

「つくし誰の子すぎなの子」と唄われるように、つくしの植物名はスギナ。早春につんつん出てくるつくしはスギナの胞子茎というものらしい。うちの近くの掘割のそばにはスギナははびこるのにつくしは見たことがない。つねづねふしぎに思っていたが、土壌の関係によってつくしは出ないこともあるそうだ。

赤羽根のつゝみに生ふるつくぐしのにびにけらしも摘む人なしに
正岡子規「竹乃里歌」

「つくしほど食ふてうまきものなくつくしとりほどして面白きはなし……」と詞書があつて十三首、つくしの歌が並ぶ。「つくぐし」はつくしの古名で「源氏物語」にも出てくる。東京・赤羽根につくしを摘みに行った弟子の河東碧梧桐が、ま

縫りくるどの手も未だ小さくて母は切なし土筆の野道
中城ふみ子「乳房喪失」

ふつうの母子の散歩にも思える歌だが「母は切なし」に真情がこぼれる。まだ病には気づいていない時期だが、離婚して小さい子を一人で育ててゆく心細さ。中城ふみ子の子どもの歌には自然の土の香がある。「土筆の野道」は童謡のようで、「土筆」と子どもたちが重なってくる。

啄木の死にし齡を一つ越し土筆摘みおりここ北上に
吉川宏志「夜光」

石川啄木の死んだのは二十六歳だから作者は二十七歳。もう啄木の人生は終わっていたのだと思ひながら土筆を摘んでいる。「やはらかに柳あをめる／北上の岸辺に見ゆ／泣けとことくに」の北上に。つくしはなぜか切ない歌が目についたのだ。



つくし





蓬

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者はなやま・たかこ

第二十二回 蓬、おおばこ

春

のよもぎの若葉を見ると摘まないと惜しいような気がする。よもぎといえは草餅。また「蓬」は「艾」とも書き「もぐさ」とも読む。お灸に使う草でもある。「百人一首」の「かくとだにえやはいぶきのさしもぐささしもしらじなもゆるおもひを」(藤原実方朝臣)の「さしもぐさ」も「よもぎ」の別名だと、ずっと知らなかった。

いざ出でて蓬摘まうよ和ぐさの香に立つ摘まば
こころなごまむ

昭和二十一(一九四六)年の春の歌。五十七歳の喜志子は郷里の信濃に疎開して敗戦を迎えた。国破れて山河あり。信濃の春をみずみずしく歌い上げる一連である。「いざ出でて」

と自分を励まし「こころなごまむ」に敗戦の傷心を癒す願いがあふれる。和草は生えそめたやわらかい草を言う古語。蓬は懐かしい古来の「和ぐさの香」である。

蓬野に母ひざまづきにくしみの充電のごとながし授乳は

春の蓬野に授乳している母。のどかな情景に「にくしみの充電」という言葉を放り込んで、塚本らしい衝撃的な歌になっている。一般的な母性のイメージを反転させているのだが、抑圧された憎しみを子にしか注げない母という存在をリアルにも感じさせる。「充電」だから憎しみは子にも蓄積されるのだ。「蓬野」のやわらかさが逆説的にうまく効いている。

かつて屋敷ありしところに頼りなく揺れるよもぎよ 風に撫でられ

鯨井可葉子「アップライト」

「蓬生」という言葉があり、荒れ果てた屋敷に老い茂る雑草のことを言った。「源氏物語」にも「蓬生」の章がある。それを思い出させる若い人の歌。よく萌えるから「よもぎ」なのだ。

野

草の中でもとりわけ大葉子はただの雑草という感じがする。誰でも知っているが目には止めることはない草。でも案外に歌には詠まれている。明治期に「車前草社」という短歌結社があって尾上柴舟の下に牧水や前田夕暮が集った。「車前草」は大葉子の中国名。「明星」に対して、地上に根づく草のわれわれ、という命名だったのだろう。

くろぐろと霜に灼けつつ群立てる大葉子の莖を
踏みて犬くる

宮修二「多く夜の歌」

霜にくろぐろと灼けた大葉子はふだんより艶めいて目立つたろう。自分が踏んでいくのかと読めば、結句で犬が登場するの

が意外。大葉子を踏みて、だけでも良さそうなのに「莖(茎)」を」とあえて言っている。大葉子は踏まれる草である。踏まれることで足についた種子が運ばれるのだという。

曇りつつ日暮となりぬ車前草の草質の花茎にぶき艶もつ

河野裕子「紅」

花と言ってもごく目立たない花穂である。その花茎が「草質」とは気づかなかつた。河野にしてはめずらしい実直な対象描写で、茎の艶にまで及ぶ。この次に「うつ向きて歩めば車前草の株立ちの大葉ばかりが今日は見える」があり、そればかりを見つめている。そんな気分の日である。

拍手する手のひらのやうにオホバコは繁茂し嬉し雨後の空き地に

川野里子「太陽の壺」

わりと大きな葉だから大葉子。拍手しようとする手のひらのようだ。そんなたくさんの手が空き地にあって嬉しいううユニークな歌。雨後の大葉子の息づかいが聞こえてくる。手をたたくな歌のリズムがびったり。大葉子は元気をくれる草だ。



おおばこ



たんぽぽ

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第二十三回 たんぽぽ、ジゴクノカマノフタ

他の草の花を知らなくてもたんぽぽだけは誰でも知っている。いちばんよく見かけるし、名前がとにかく可愛い。球状になる種子が鼓のようだから「たん・ぽぽ」と打つ音に模したという。だから花のことではないのだが、あの黄の花もたん・ぽぽと弾んで咲いている感じがする。

廃れたる園に踏み入りたんぽぽの白きを踏めば
春たけにける

北原白秋「桐の花」

これは白花たんぽぽ。関東では見かけないが、西日本では今もめずらしくない在来種らしい。白秋の故郷、福岡県柳川での歌である。「廃れたる園」の寂しい趣きと、たんぽぽの白がよく合っている。「踏み入り」と禁断の園に入っていくようで、さら

に「踏めば」と白を蹂躪する感じに若さが匂う。ただただ春。たんぽぽの黄をきざみたるごとき陽よときにばからしくなる人生は

村木道彦「天啓」

陽がたんぽぽの黄をきざんだようだ。あの細く切れ込んだ花びらをうまく表現している。下のフレーズは、フォークソングのようで、つい口ずさみたくなる。七〇年代のまさに村木調。たんぽぽのあつからんとした黄はこういう気分を誘う。

いつの時代のわらべがほうと吹きたるやタンポポの種子窓より入り来

永井陽子「小さなヴァイオリンが欲しくて」

子どもはたんぽぽの絮を見ると必ず吹いて飛ばす。いつの時代のわらべが吹いたのか。時空を越えて窓から入ってきた種子。江戸時代のわらべも吹いていたことだろう。いつでもどこにでもあって懐かしく明るい。

◇◇◇

ジゴクノカマノフタ、つまり「地獄の蓋」という怖い呼び名の花がある。葉っぱがべたつと地に蓋をするように這うので、この名がついたらしい。植物名は「キランソウ」で「金瘡小草」「金欄草」などと書く。何か黄色のイメージだが、花は濃い紫でけっこう綺麗だ。たまに道端で見かける。

若ければジゴクノカマノフタという花のつまらなく咲く春の畦道

岡部桂一郎「戸塚閑吟集」

雪解して三月二日人の世に必死に咲けるジゴクノカマノフタ

同「竹叢」

「カマノフタ」が「カマフタ」になってしまっているが、そう言い慣わしていたのかもしれない。この歌の時期、作者はもう

関係を断つて開きし老境のジゴクノカマノフタのむらさき

上田治史「東野」

どう解釈するか迷う。関係を断つことで開いた老境。目の前の花のむらさき。場面はそういうことだが「老境のジゴクノカマノフタ」とつなげて、何か地獄の蓋が開いたような感じを醸し出している。でも「むらさき」には励まされていそう。

返り咲くジゴクノカマノフタ蓋の閉め忘れかな十一月を

足立晶子「はれひめ」

季節はずれの十一月に咲いているのを「蓋の閉め忘れかな」とユーモラスに詠んで楽しい。面白い名前ゆえに詠まれるということがある。俳句ではこの長い名は無理かもしれない。



ジゴクノカマノフタ



花菰
はなむぎ

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第二十四回 花菰、からすのえんどう

花菰は葉が菰のようで匂いも菰に似ているので、この名があるがユリ科なのだそう。まぎらわしい。明治時代に鑑賞用に入ってきた、今は野の花のごとくどこにでも咲いている。実家の庭の隅に咲いていたのは真っ白だったので花菰は白い花、と思っていたのだが、いまベランダにたくさん咲くのはうす青い花だ。

花菰の正六弁の朗らかに清しよしなき憂ひを棄てむ
酒井佑子「矩形の空」

これは白の花だろうか。「正六弁」という言い方は初めて見た。正確には三枚の萼の上に三枚の花弁が載っているのだが、その幾何の図のような明晰さを言葉にしたのではないか。それが「よ

しなき憂ひを棄てむ」ときっぱりとした思いにつながっている。

けさの庭星のかたちの白き花満ちあふれをりべツレヘムの園
春日いづみ「地球見」

「ハナニラの別名はベツレヘムの星」と註付きの一首。英名では「ベツレヘムの星」と言う。「春の星花」とも言い、単に星のような花、から来ているのだろう。歌には「ベツレヘムの星」を出さずに、その花があふれる庭を「ベツレヘムの園」と言ったのが美しい。クリスチャンである作者らしい歌である。

粉ほどの雨ふれる朝うす青き花菰はみなうつつむきてをり
横山未来子「樹下のひとりの眠りのために」

これはうす青い花。花菰はたいいてい真上にバチッと花を開いている。それが雨で下を向くと、いかにもうつむく風情だ。青い花の方がはなびらがうすいのか、うしろがわに筋も透けて見えて儚い感じがする。

◇ ◇ ◇

「カラスノエンドウ」は漢字だと「烏野豌豆」、つまり「カラス・ノ・エンドウ」である。「カラス」ではなくて「カラスノエンドウ」が正しい。マメ科のピンクの小さい花が可愛く、春のなつかしい情緒を感じる。

這ふものになりてカラスノエンドウは巻き髭あはれ拙くほそき
玉城徹「香貫」

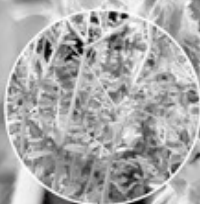
葉先の巻き髭はごく細い。押し花にしておいたら、くるりと巻く髭が得も言われぬ形で見えた。この歌は巻き髭を「あはれ拙くほそき」と言っている。あまりの繊細さに感じ入っているのだらう。カラスノエンドウは直立できるが、巻き髭でとらえたときには「這ふもの」になる。いわば受動的な蔓草。その形態をこんなふうに詠んでいる。

鳴らし方おぼえていたりばつぱつにふくれるカラスノエンドウの実の
なみの垂子「バード・バード」

英豆を草笛にして鳴らして遊ぶので「ピーピー豆」ともいう。鳴らし方がけつこうむずかしいが、この人はしっかり憶えているようだ。「ばつぱつに」が俗語っぽくてもおもしろい。太って服がばつぱつん、という感じで、英実のふとり具合がいきいき。

いつの日か私は私になるだらう からすのえんどう返事をなさい
遠山利子「からすのえんどう返事をなさい」

なんともとぼけた歌だ。なぜ「からすのえんどう」なのだろう。でも他の花よりは返事をしてくれそうな感じはする。長い名が姓名みたいにも思える。「私は私になるだらう」という押問答のようなセリフにうまく付いていておもしろい。どこかおっとりしていて気持ちを寄せられる花である。



からすのえんどう

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかし

第二十五回 すかんぼ、ハルジオン／ヒメジオン

「土」手のすかんぼ ジャワ更紗（中略）夏が来た来た（北原白秋）作詞「すかんぼの咲くころ」という唄を思い出す。ジャワ更紗は何を喻えているのか未だに定説はない。本名はスイバ（酢葉）で嘔むと酢っぱい。昔の子供は嘔んで遊んだようだ。

すかんぼの茎折り取りて老いしわれ嘔みに嘔むなり涙ぐましく

窪田空穂「さざれ水」

静岡県伊東の山畑の畦にきて「怪しくも心引くかも畦草の杉葉すかんぼ紫雲英繁縷ども」と野の草にはしゃいでいる。幼心になってすかんぼを「嘔みに嘔む」。涙ぐましくと自分でも思うのだ。この姿を想像すると何か感動してしまう。昭和六年の歌

だが空穂はまだ五十代。当時は「老いしわれ」なのだろう。時は長しほろぶるものの安けさを夕日にすきて光るすかんぼ

土屋文明「山下水」

「時は長し」という初句が変わっている。日も長くなってきた。ぼんやり草などを見ていると、今の時間は長く感じられるがでもみなほろびる。夕日に透き通って光る「すかんぼ」はほろびの安けさをもっているようだ、と読んでみる。昭和二十一年の歌で、敗戦の感慨が滲む奥行き深い歌である。

川土手にすかんぼの白き花咲けりもう正気なき祖母に会ひにゆく

小島ゆかり「憂春」

すかんぼの花穂は白いという感じではないので、これはイタドリかもしれない。イタドリの別名もすかんぼと言われることがある。でも「すかんぼ」の名のなつかしさと「もう正気なき祖母」がそこはかとなく重なってせつない。

◇ ◇ ◇

ハルジオンとヒメジオンは違うのだが、よく間違われる花なので、いっしょに挙げることにした。どちらもムカシヨモギ属でよく似ている。ハルジオンの方が先に春咲いて、ピンクつばく花弁がやわらかく密集している感じ。名前も微妙に違い、春紫苑と姫女苑という漢字もややこしい。

“はるちよをんなげにびんばふくさといふ” 吹き出し文字は綿毛とぶなか

大島史洋「四隣」

「貧乏草」というひといい別名はハルジオン、ヒメジオン両方にあるようだ。「吹き出し文字」の引用のまま「はるちよをんな」は違っているし「びんばふ」の旧仮名も違う。どこに吹き出し文字があったのかわからないのだが妙に面白い歌だ。なぜ貧乏草というのかという疑問がふわりと浮きあがる。

変わりたいような気がする廃屋をあふれて咲いているハルジオン

北山あさひ「崖にて」

廃屋に咲く、でなく「廃屋をあふれて」にハルジオンのエネルギーと明るさを感じられる。かつて家族の住んでいた家は、野に変わっていく。自分も「変わりたいような気がする」とほんやりとつぶやく。この廃屋だらけの日本で。

名前にてわれを呼ぶことなき君がヒメジオン抱え向こうから来る

永田和宏「百万遍界限」

これも正しくは「ヒメジオン」。この花を抱えてくる人は珍しいだろう。その君は自分を名前で呼ばない。「あなた」と呼びながら近づいているのかも。この花がユーモラスに生きている。おのづから地を噴き出でてひめぢよをんしろく咲き群がりたる嘉す

阿木津英「宇宙舞踏」

どこにでも繁殖する最もありふれた花のヒメジオン。それを「嘉す」と荘厳に詠みあげた。調べが独特である。



ハルジオン／ヒメジオン



草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第二十六回 荒地野菊、キンポウゲ

今 よく見かけるのはオオアレチノギクらしい。丈高くぼうぼうと繁る。それより小ぶりでやわらかなアレチノギクはあまり見られなくなっているという。荒地に生える野菊ということだが、キク科でも野菊の花にはどこも似ていない。荒地野菊はなほつほと浮びいる日だまりを昨日へとびて行く蝶

高安国世「街上」

伸びた茎に小さな白い花がほつほとつく。日だまりでは茎は見えず、花だけが浮かんでいるように見える。蝶はなぜ昨日へ飛んでいくのだろう。明日ではなく昔でもなく昨日へ。わからないけれど、昨日も同じ場所と同じ風景を見たのではないだろうか。ふと昨日が今日のような錯覚。

少しばかりの灯りも今日は役に立つ荒地野菊の
小さき白花

百々登美子「荒地野菊」

ほんの少しの灯りでも求めたい日だったのか。荒地で出会った灯りという感じで、私は何となく旅人とか兵士をイメージしてしまった。それも日本ではなくてイギリスとか。荒地野菊という名前のゆえだろう。ごく日常の歌なのに。

胸にしむ野の匂ひかな荒地野菊折し緑素が指そ
めてゐる

馬場あき子「早苗」

荒地野菊を手折る人はめずらしいかも。「緑素」は葉緑素かと思うが、光のエネルギーを取り込む。緑素に染まる指から野

の匂いがする。胸に吸い込むと野の力が宿るよう。まだ若い馬場あき子のみずみずしい歌である。これも荒地野菊の名が生きている。

キン

キンポウゲの五弁の花は黄にかがやいてとても美しい。漢字では「金鳳花」だが、これだと蚊取線香の品名みたいだし、花の軽やかさにも合っていない。なぜか「毛茛」とも書き、北原白秋はこの字を造っている。「ウマノアシガタ」（馬の足形、毛茛）という別名もあって、私はこっちで記憶していた花だ。葉のかたちからの名前のようなだが、しっくりこない。この花はカタカナの「キンポウゲ」がいちばんよく似合う。

草のなか 光さだまるきんぼうげ。いちじるし
もな。花 群れゆらぐ

釈道空「海やまのあひだ」

きんぼうげ、むら／＼黄なり。風のむた その
花ゆらぐ。いろひ かげろひ

同

大正六年作。道空の句読点や一字アケなどの試みが全開して

いて斬新だ。「きんぼうげ」の花の動きだけ詠んで、さながら印象派の絵画のよう。その美しさにうっとりしている感がある。氷河期より眠り続けしマンモスの口の中に残った
るキンポウゲ

さいとうなおこ「キンポウゲ通信」

シベリアで氷漬けのマンモスが発見され口の中にキンポウゲが見つかったという。なぜ温帯に多いキンポウゲがあったのかはまだ謎のようだが、一瞬にして温帯が凍土になったらしい。草原でどこかにキンポウゲを食んでいるマンモスの姿が思い浮かぶ。そのままに凍りついて眠り続けた。キンポウゲと共に。気の遠くなるような時間、そして運命を感じさせる。

キンポウゲおまへのなかに揺れてゐる毒をおも
へばなにかたのしき

久我田鶴子「水の翼」

キンポウゲの汁は有毒である。汁だからだろうか、花が揺れると中の毒も揺れる。「おまへのなかに揺れてゐる」の二人称がユニークだ。こんな可愛い花に毒があるとおもうとしたのしい、というのが楽しい。



草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第二十七回 ねじばな、へくそかずら

小さな茎に小さなピンクの花が連なって螺旋状に巻きのほ
る「ねじ花」はとても可愛い。花が振れているから「振
花」。ラン科なので、一つ一つをよく見ればまさに蘭の花の
たちだ。

ねじばなは芝生によく出る。わが団地の芝生にもいっぱい。
なぜ芝生に多いのかはよくわかっていないらしい。芝から抽
んで真直ぐ立つ、この花のさまがよく出ている。「ねじりそ
ね」が面白い。ちゃんと巻いてないでまっすぐな花もたまに見
かける。うっかりものだね、という感じがユーモラスだ。

上田三四二「照徑」

もぢずりの花きりきりと咲きのぼり天に小さな
穴をあけたり

稲葉京子「紅を汲む」

ねじばなは「もぢずり」（振摺）とも言う。咲きのぼって天
に穴をあけた、という童話のような発想の歌である。「ネジバ
ナ」の方が物理的には合いそうだが「もぢずり」の名には思い
の一端がある。「リ」音が一首に響く。

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑにわが産土を
捨てねばならぬ

本田一弘「あらがね」

「しのぶもぢずり」は福島県信夫地方でつくられていた布のね
じれ模様の摺りの衣のことで、「百人一首」の「みちのくのしの

ぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにしわれならなくに」（河原左大
臣・源融）は有名。この歌を受けて、福島府の作者は、原発事
故で故郷を捨てざるを得なかった人々の思いを詠み上げている。
この「もぢずり」がねじばなの別名になっていることを興味
深く思う。歌はこの花に関係ないのだが、結び付いて想起され
てきたことの妙を思うのである。

◇ ◇ ◇

へくそかずらは「屁糞葛」と書く。なんともひどい名前を
付けられたものだ。小花はとても可愛い。白い花の緑は
フリルのようで中心が赤紫。すいかずらのように香りが良そ
うに見えるが、葉はちぎるととても臭い。「万葉集」にも「白
葉に延びおほとれる屎葛絶ゆることなく宮仕へせむ」（高宮
王）と詠まれている。これに「屁」まで足されたのは、いつ
ごろからのだろう。

灸花、屁糞葛と呼ばれけり名を知るのちは親
しみ深し

石井幸子「川端通り」

真ん中が赤いので「灸花」とも呼ばれる。これも、さほどい

い名前でもないが、作者は面白い名前に親近感を持ったよう
だ。一度聞けば覚えるし、人にも教えたくなる。

灸花天より蔓を降ろしいて引けばぬばたまの闇
もこぼるる

佐波洋子「秋草冬草」

夜だから蔓がどのあたりから降りているのか見えない。「天
より」と断定して「闇もこぼるる」までの呼吸が爽快だ。「闇
に」ならふつうだけれど。白い花とともに闇もこぼれる。

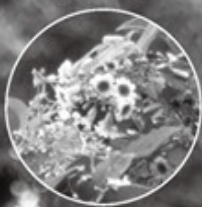
へくそかずらのびのびとして電柱の高さを巻き
ぬ花灯しつ

なみの亜子「そこらじゅう空」

電柱の高さまで巻いているへくそかずらは圧巻だ。隙間なく
巻いた葉に底紅の白い花がみな正面を向いていて、いかにも灯
しているという感じがする。作者はどこか羨望のまなざしかも。
底紅の白き小花が愛らしいへくそかずらはたし
かに臭いが

小林峯夫「途上」

そのものズバリの歌。「愛らしい」に手放しの気持ちちがこもる。



へくそかずら



棕櫚

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第二十八回 棕櫚、夾竹桃

棕 桐はヤシ科で南国的だが、どこにでもよく見かける。家裏に植えられていたり、空き地にも生えていたりする。勝手に生えるのをノラジュロ（野良棕櫚）と呼ぶらしい。植物に「野良」がつくのはこれだけだろう。幹が毛むくじやうだから。棕櫚や棕櫚などに利用されて、昔から親しみのある植物である。

種豚は深く押し黙り棕櫚の木のかげでやるもとをまた廻りたり

棕櫚（とも書く）の木は高くかきやき、豚は地に低く木の廻りを歩いている。棕櫚のかげでやるもとに対して、豚は「深く押し黙り」と、豚の命のやるせなさが強調されている。しかも「種豚」。

夫婦のこころ一体となるあはれさよそりたつ
シュロの木を憎みて

シュロの木は邪魔になりがち。排除したいこころは一つ。なぜか「ひそひそ」と相談。シュロゆえにリアルな歌である。

夏 というと夾竹桃が浮かぶ。昭和二十年広島原爆投下後の焦土にいちちはやく咲いて復興の象徴的な花にもなっている。打ち上げ花火のように広がる赤や白の花はとても美しい。

秋づきて朝霧さむき街角に夾竹桃のはな赤く散りたり

大正七年作の歌で「街角」は大川（隅田川）沿いの両国橋のところである。もうこの時期、街路樹の夾竹桃があったのだ。朝霧の街角に散っている赤い花が印象的な一首。

太宰治は夾竹桃の花が好きで、昭和十一年に住んだ船橋の家の玄関に植えていた。壇一雄に「夾竹桃だよ、夾竹桃」とさかんに自慢したという。青森出身の太宰には、この南国的な

人間に支配される命の営みのあわれさ。「種豚」と「棕櫚の木」、言葉のインパクトが印象に強く忘れ難い。大正二年作。

棕櫚の樹の枯れし下葉は垂れてゐて風音つねにそこよりさやく

元気に広がる葉の下に枯れた下葉が垂れている。よく見る棕櫚の樹のさまである。何か無様な感じさえる。その枯れて垂れた葉から作者はさやく風音を聴くのだ。「つねにそこより」に、風音の発生源をたどるかのような心境がのぞく。

シュロの木を伐る相談を妻とわれひそひそしをりシュロの木の前に

小池光「演義集」

花が珍しくて、ときめいていたのだろう。

夾竹桃咲きて校舎に暗さあり饒舌の母をひそかににくむ

寺山修司「血と麦」

夾竹桃の花のくらやみ背にしつつ戦後の墓に父の戒名

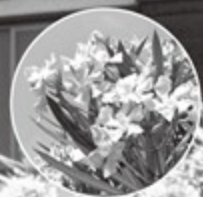
同「テーブルの上の荒野」

校舎の夾竹桃になぜか母の饒舌を思っている。夾竹桃の花のまぶしさゆえに校舎は暗く、母への思いも暗い。二首目は父の墓と夾竹桃。これも「花のくらやみ」である。「戦後の墓」に、戦争の傷痕が刻まれている。寺山修司も青森の人だが、夾竹桃には戦後を重ねた暗いインパクトを感じているようだ。

ひとに棄てむ明日あらばこそとろとろと夾竹桃は夜の窪に咲く

佐伯祐子「あした、また」

上の句の解釈は難しい。明日を棄てようとするなら、ということだろうか。とろとろと咲く夜の窪の夾竹桃は、作者の心情そのものように暗く濃く溶けて判然としないう。



夾竹桃



われもこう

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかし

第二十九回 われもこう、彼岸花

われもこうはバラ科だが、花はごく地味である。花弁もなうか、その何気ない風情が昔から愛されている。「徒然草」でも、家にあってほしい秋の草のリストの中に入っているし、「源氏物語」（匂宮）にも登場する花である。

吾木香すすきかるかや秋くさのさびしききはみ君におくらむ

なんと言つても浮かぶのはこの歌。初めに「吾木香」だけ漢字で置かれて字面がすっきりと美しい。これが「女郎花」とか「藤袴」だとも映えない。秋の野がばあつと広がるとともに、調べの良さにうっとりとする。別離のさびしさのきわみを

君におくろ。この悲哀は深いけれど。
どこの子かわが子かわれか女の子吾亦紅さく野の道をゆく

「吾亦紅」とも書く。これは従来からの表記ではなく近代からのようだが、今はこちらで書く人が多い。「私だつて紅いのよ」といつてるような名が、この花の風情にぴったりだからだろう。「女の子」が出てくるのはまさに重なるイメージだ。それは「われ」にも重なってくる。童謡のような調べが懐かしい。

吾亦紅じくつじくつと空間を焦がしていたり
戦争ははだか

渡辺松男「泡宇宙の蛙」

衝撃的な歌で忘れがたい。難解だ。花が頭のように兵士のイメージにつながったのかもしれない。「吾亦紅」という名が、われも紅いのがある、と叫んでいるようにも思える。今あらためて読むと「戦争ははだか」というフレーズが突き刺さってくる。

◇ ◇ ◇

彼岸花という新美南吉の「ごんぎつね」を思い出す。「墓地には、ひがんだ花が、赤いきれのようにさき続いている。兵十のお母の葬式の場面である。秋彼岸のころ咲く「彼岸花」は、墓や葬式を連想させて、昔は縁起が悪いと疎まれてもいたようだ。今は川のほとりなどに群れ咲く彼岸花は観光スポットでもある。

曼珠沙華赤と咲けばむかしよりこの道のなぜか墓につづくも

前川佐美雄「天和」

別名「曼珠沙華」は梵語で「赤い花」という意味らしい。「まんじゅしゃげ」という響きがいい。この歌、墓につづく道になぜか咲いている、ではなく曼珠沙華が咲けば「なぜか」墓

につづく、と逆なのが面白い。自然に生えているのではなく墓のそばには人が植えたらしい。諸説はあるらしいが、やはり彼岸に咲くからお供えの花なのだろう。
狐らが火あそびをする彼岸花濃きくれなみを野山にともす

吉植庄亮「光の如し」

「ごんぎつね」ならずとも狐と彼岸花は何かつながる。「狐のたいまつ」「狐花」という別名もあるように。伝説もさまざまあるようだ。狐が火あそびで野山にともしていく赤い花。このイメージはふしぎな楽しさで、この花にびつたりだと思ふ。

夏ゆけばいつさい棄てよ忘れよといきなり花になる曼珠沙華

今野寿美「若夏記」

葉もない茎がまっすぐに立って花になる曼珠沙華。いきなり花があらわれる、その感じ、まさに「いつさい棄てよ忘れよ」のインパクトがある。彼岸花は別名が最も多くて四百以上あるという。「死人花」というものまである。人間に生々しく近い花なのだ。



彼岸花



コスモス

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかし

第三十回 コスモス、数珠玉

コスモスは明治十年代に日本に入ってきたらしい。古来からある花ではないのに、今では日本の花以上にポピュラーで郷愁が誘われる。「秋桜」ともいうが、個人的にはこの名前がしっくりこない。何でも「桜」を付けるのはどうかと思うし、桜に似てもいいない。花びらが整然としているので「宇宙の調和」という意味で「コスモス」と命名されたらしい。

コスモスは瓦礫の間に花そよぎ炊ぐひとみてバラックのうら

昭和二十一年秋の歌。バラックのうらの瓦礫の間にそよぐコスモス。外で煮炊きをしている人もいる。生活に必死な人々と淡いコスモスの花。私も知人から敗戦後の焼跡にコスモスが咲

いていて、ふしぎなほど美しかったと聞いたことがある。
コスモスの揺れ合ふあひに母の恋見しより少年は粗暴となりき

中城ふみ子「乳房喪失」

母は自分、少年はわが子だが、三人称で語って小説仕立てになっている。揺れるコスモスの間から見た少年が見た母と恋人。情景が美しいだけに残酷である。粗暴となる少年の傷を容赦なく描いて自らの背徳を抉る。いかにも中城ふみ子である。

人住まうことなき家の立ち並ぶ展示会場に揺れるコスモス

依万智「サラダ記念日」

焼跡のバラックからバブル期の家の展示会場へ。人の住まないモデルハウスの敷地に揺れるコスモス。懐かしいこの花が最も似合わない場所をキャッチして、豊かになった時代の寂しさが感じられる。

◇ ◇ ◇

私の生家の庭にも数珠玉が生えていて、糸でつながる前に実の穴の芯をつついて抜くのが大好きだった。薬のような芯が入っている。お手玉に入れることもあった。

数珠玉の實をとりきたりをさなくてわがせしごとく子も遊びをり

前川佐美雄「積目」

父がしたように息子も数珠玉で遊ぶ。「わがせしごとく」は何をして遊んでいるのかわからないが、幼い自分のしぐさがふと思ひ出されたのだろう。数珠をつなぐように自分と子がつながったようで微笑ましい。

飛鳥川の川原朝より晴れ渡り数珠玉の円実白く光れる

尾崎左水子「薔薇断章」

数珠玉はイネ科の植物の一種で、川原とか水辺によく生えている。「飛鳥川の川原」が何かゆかしく、日本に古代から在った植物という数珠玉にふさわしい。白い実もときとき見かける。黒と白の実がまじっていることもある。晴れ渡った川原に、青々とした葉の陰から光る白い実。美しい叙景歌である。

小中英之「過客」

こちらは夕方の黒い実。「夕日影うすくとどめて」が卓抜で、数珠玉の実に夕日が残ったように黒くなっていく推移がこまやかにうつしとられている。これも叙景の歌の良さを感じ

そのかみの魔法忘れし者の眼に秋づきてより光る数珠だま

松平修文「水村」

かつては魔法を知っていた者。今は忘れてしまっている。数珠玉は魔法を呼び覚ますように光る。そういう魅惑的な力を数珠玉は秘めている。何かをあなたは忘れていませんか、と。



数珠玉



高三郎

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかし

第三十一回 高三郎、箒草

「高三郎」なる目立つ名前、ごく目立たない野草がある。名の由来はわかっていないらしい。「草木名彙辞典」(柏書房)を見ると別名に「鰻」(鰻殺)などあってびっくり。細い茎と葉っぱ、キク科の小さな花、どこも鰻を掴めるようではない。水田の畦などによく生えているようだ。

つつましく雨に打たれて咲いたり高三郎は草の間の黄よ

小さな花が夏から秋にかけて咲く。白い花弁の中が淡い黄色なので、草の間からその黄が見えている。「つつましく」がこの植物の風情にぴったりだが「高三郎」という名とのコントラストで歌がよく映えている。

かがみては草花の名を教へをり矢絰似合ふよな
タカサブラウの花

河野裕子「季の琴」

欠けてゆく月の暗さはなつかしい 高三郎の花
に踟り

同「草母」

矢絰が似合うような、ではなく「似合ふよな」という詠嘆だろう。この花の和風な簡素さから「矢絰」をイメージしている。それだと「高三郎」が合いそうだが、ここではカタカナ表記だ。草花の名を教えている相手は、あとの水田和宏の歌でわかる。二首目は月食の夜だろうか。そのどこかなつかしい暗さのなかで高三郎の花にかがんでいる。

もういちど高三郎を教へてよありふれた見分け
のつかない高三郎を

水田和宏「夏・二〇一〇」

教えてくれた妻はもういない。教えてもらっても覚えられなかった高三郎。「もういちど高三郎を教へてよ」がせつない。

箒草は古来「葎木」と言い「源氏物語」の巻の名にもなっている。遠くからは見えるが近づくと思えないという

伝説にちなんで詠む和歌が登場する。秋の紅葉が燃える灯のようでも美しい。箒にするから箒草で実用的な草でもあった。

隣室に人は死ねどもひたぶるに箒ぐさの實食ひ
たかりけり

斎藤茂吉「赤光」

入院していて隣室の人が死んだが、自分はただ無性に箒ぐさの実が食べたかった。回復期の生の欲求なのだろう。箒草の実「とんぶり」で畑のキャビアとも言われて今は一般的にも人気である。

武蔵野やはてなく広し箒草ゆすりて来る農夫た
け低し

今井邦子「明日香路以後」

この箒草は丈をそろえて栽培されていたようだ。低い箒草をゆすりながら来る農家の男性も丈低く見えた。はてなく広い武蔵野の中に人物を配した風景画のよう。昭和十八年作。箒草は「ほうきぐさ」「ははきぐさ」両方の読みがある。

焼跡に溜れる水と箒草そを囲りつつただよふ不安

宮修二「小紺珠」

昭和二十年十月の歌。箒草は紅葉の季節である。焼跡に溜まる水と真っ赤な箒草は何ともいえずシュールだ。「ただよふ不安」が、敗戦後の心理としてとてもリアルに感じられる。

遠くより眺めてあればへもふもふ感猫の毛並
みのやうなコキアだ

恒成美代子「而して」

今は「コキア」の名で人気のある箒草。たしかに「もふもふ」結句が「葎木」だったら、この歌のモードはしっくりこない。



箒草



野菊

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかし

第三十二回 野菊、野葡萄

野に咲く菊は何でも「野菊」だけれど「野紺菊」をさすこ

「野菊」では清純な花として絶賛されている薄むらさきの小さな花である。伊藤左千夫の小説「野菊の墓」（明治三十九年）は有名で、素朴で可憐な民子を「野菊のよう」とたたえる。

「むらさきのか弱に見ゆる野菊には猛き男の子も心なぐらし」（伊藤左千夫歌集）と歌にも詠んでいる。現代ならジェンダー問題にもなりそう。「むらさき」だからやはり野紺菊だろう。

野菊とぞさも媚びなよるすがたして野に咲く見れば行きもかねつる

わたしは野菊よ、とさも媚びてなよなよ寄りくるすがた、と

若山牧水「別離」

疎むような秋水の歌。左千夫の「野菊の墓」の二年後くらいで作なので、何となく頭にあつたのかもしれない。野菊も気の毒だ。乱れあひまたしんとして野菊咲けりわが顔流れゆくごとき陽の中

森岡貞香「白蛾」

自分の顔が流れてゆくような茫然とした歩みに「乱れあひまたしんとして」の野菊が咲いている。この表現は何か自分のあたまの中の状態のようでもある。結核で衰弱している時期の作で、野菊は慰籍として目に映っていたにちがいない。

水のあるほうに曲がつていきやすい秋のひかりよ野紺菊咲く

吉川宏志「海南」

水に光はいつも添っている。光が水を求めていくような表現が魅力だ。「曲がつて」がとくに。この歌では水が少し遠くにある感じがする。野紺菊には光はさして、うす暗がりに咲いている感じがする。

◆ ◆ ◆

野

葡萄の実の美しさは格別だ。シャープトーンの空色や青や紫や白、時にピンクの粒が宝石のようにまじっている。うちの近くの線路脇の敷にからんでいて、この実に年々出会うのはよろこびである。こんなところにと意外に思ったものだが、どこにでもよく生えているらしい。ブドウ科の蔓性低木である。

山の上は秋となりぬれ野葡萄の実の酸きにも人を恋ひもこそすれ

土屋文明「ふゆくさ」

「野葡萄」に「えび」とふりがながあるのは、野葡萄の別名の「えびづる」だろう。別名といっても実際はだいぶ異なるものらしい。こちらは黒いつぶつぶの実の房が垂れて食べられるもの。古来より日本では葡萄のことを「えび」と言い「古事記」

にも出てくる。伊邪那岐の命が黄泉の国の伊邪那美の命に追いかけられたとき投げた実である。その酸っぱい味に人を恋う、というのは懐かしい味とともに、この由来が重なっているのかもしれない。

一群といふ美しさこの星の陸半球に山葡萄照る

梶原さい子「あふむけ」

「山葡萄」とも言われ「歳時記」には野葡萄といっしょに記載されている。これも「えびづる」のことだとか、三つともそれぞれ違うとかで混乱するのだが、この歌は「一群といふ美しさ」という表現から野葡萄に思われる。こんな美しいものがこの星の陸半球にあるのだ、と最大限の賛辞だろう。

瀟洒たる日本の秋は熟れながら野葡萄の実の一つ一ついろづく

花山多佳子「林立」

これはまぎれなく野葡萄。一つ一つ色合いを異にして熟れていくさまが、すてきに瀟洒な日本の秋なのだ、という、これまた賛美の歌なのだ。



野葡萄



羊歯

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかし

第三十三回

羊歯、苔

四

億年前から地球上にあったと言われるシダ植物。種類はさまざまで蕨やゼンマイもその仲間だが、「シダ」というと一般には「裏白」とも呼ばれるものを指すようだ。正月飾りに使われるお馴染みの葉っぱである。しだれるから「シダ」で「羊歯」「蘭菜」と書く。羊の歯に似ているからともいう。

ここにもほそく萌えにし羊歯の芽の渦葉ひらきて行春のあめ
斎藤茂吉「ともしび」

初句四字、「ここにも」で切って読む。ああ、ここにも羊歯の芽が、という感じだろう。「渦葉」は茂吉の造語ふうで「ひらきて行春のあめ」とつながる音楽的なひびきが心地よい。羊歯の芽がこんなに繊細に美しく詠まれるとは。そういえば「石ば

しる垂水の上のさ麻の萌えいづる春になりけるかも」(『万葉集』・志賀皇子)の麻もシダである。

雨期の地に呪詛の掌のごと揺れてある羊歯あり
杜沢光一郎「黙唱」

羊歯の葉となると暗いイメージになることが多い。一九七〇年代の歌で、当時戦後の平和の裏の欺瞞や陰鬱を感じとる若い人は少なくなかった。そうした時代の重みへの呪詛が、雨期の羊歯に託されて詠まれている。

羊歯、いいえ羊歯群落のうつそみと知るはカマンペールの白をふふみて
水原紫苑「快樂」

羊歯とは一本でなく群落なのだ、という気づきが、この言い替えになつていて、そういう群落の中の自らであることを知る。微である「カマンペールの白」をふふみながら。羊歯は人間の暗さと重ねられやすいのだろうか。

◇ ◇ ◇

苔

も地衣類と呼ばれる植物の総称だが、区別されることもなく「コケ」である。「木の毛」が語源だという。なるほどと思う。「わが君は千代に八千代にさざれ石のいはとなりて苔のむすまで」(『古今和歌集』・よみ人しらず・国歌の元歌)のように「苔むす」という、古さの慣用表現になることが多い。

御墓石御名のくぼみにうす苔のつきたる見れば
年ふりにけり
岡麓「庭苔」

子規の墓に水をそそぎて苔つかぬ石を嘆きし先生を思ひ出づ
土屋文明「山谷集」

どちらとも正岡子規の墓の「苔」を詠んでいるのが面白い。岡麓の歌は大正十四年作で、子規の没後二十三年たっている。

「うす苔」がついて年月が経ったなあという感慨。土屋文明の歌の「先生」は伊藤左千夫で、もっと前に見た子規の墓に苔がつかないことを嘆いていたという回想の歌である。

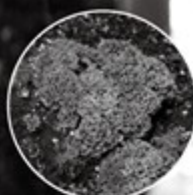
いきいきと緑金の苔のいきづくは若く失くせし
何に似つらむ
斎藤史「ひたくれなゐ」

「ひかりこけ」を詠む一連の中の歌。洞窟の入口に生えて外光に反射して光る。その苔に、若き日の自分を投影している。花とか葉でなく「苔」であるのがユニークだ。

この歌はひかりこけと読まなくてもいい歌に思える。苔に日が射すと、この通り緑金に息づいてとても美しい。

春の雨キッスのように受けているスギゴケの花
萌える小道で
早川志織「種の起源」

ベタっとつく苔とくらべて「スギゴケ」は丈もあり、杉の若芽のようで明るい緑だ。苔には花は咲かないが胞子が白く出て可愛い花のように見える。春の雨のキッスを受けているわたしとスギゴケ。植物愛に満ちる作者のみずみずしい歌。



苔



かたくり

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第三十四回 かたくり、ホトケノザ

かたくりは古名を「かたかこ」といい『万葉集』には「ものふの八十をとめらが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花」(大伴家持)と詠まれている。乙女たちと堅香子の花はよく似合う。「かたかこ」は傾いた龍の意だともいう。たしかに龍のようだと納得。「片栗」は球根の片側が栗に似ているからという。

をさなくてわがふるさとの山に見し片栗咲けり
みちのくの山に

三ヶ島霞子「吾木香」

かたくりの花は早春に山のあたりに群れ咲くので、そのへんでは見られない。東京に住む霞子は病氣療養のため友の原阿佐緒の宮城県の家滞滞する。霞子のふるさととは埼玉県の狭山丘

たくりの花びらは思い切り反っている。だから龍にも見えるのだが「風ぐるま」という見立てにも納得する。風も吹いて花が動いているのだろう。絵本のようにかわいらしい。

◇ ◇ ◇

いぬふぐりや踊り子草などといっしょに春あちこちに咲き出すホトケノザ。丸い葉が座のように開んで筒花を掲げているので、この名がある。シソ科のピンクっぽい紫の可愛い花である。春の七草の中にある「ほとけのざ」とは全くの別物。春の七草の「ほとけのざ」は「コオニタビラコ」というキク科の植物で、黄色の花が咲く。

仏の座石をめぐりてはな咲けり唇形ひらくさま
も差しく

生方たつゑ「浅紅」

仏の座は、筒形の赤紫の花の先が唇のように見える。こういう花を「唇形花」という「差しく」は、こちらが恥ずかしくなるような可憐さ、という感じか。唇をひらくさまが、女性の作者にとって、ちょっと気恥ずかしい思いを感じさせたのだろう。「石をめぐりて」「唇形ひらく」の言葉の対応が面白い。つ



ホトケノザ

陵の麓で、片栗もよく見られたことだろう。みちのくの山に見る片栗の花に幼き日になつかしくよみがえるのだ。

おのもおのも春日に影しカタクリの花はも寂し
一莖一花

田谷 鏡「水晶の座」

「一莖一花」の花はめずらしくはないのだが、かたくりによく言われるのは群れ咲くゆえかもしれない。その一つ一つの花が、それぞれ影を落としていて。その感じが寂しい。

昼ふけし光のあつまるかたくりの花は反りつつ
みな風ぐるま

三國玲子「蓮歩」

かたくりはユリ科で、ユリの花びらも反っているけれど、か

いでに「仏」という言葉も。

野に採りて器に活くるホトケノザむらさきの花
見るまに散りぬ

玉城 徹「弱巷雑歌」

ホトケノザの花は器や壺に挿して見ると、こんなに綺麗かと思う。わたしもよく挿して眺めるが、見るまに散ったことはない。でも草の花は野では元気で強いけれど、摘んで活けると、すぐに萎れたり散ったりする。そのはかなさ。野にあるべきものを、という思いがある。

向う山にまだ日の残る冬至の日ホトケノザの花
ふたつ咲きをり

足立昌子「はれひめ」

ホトケノザは早春から咲くが、冬にも咲いていることはよくある。冬至の日に見つけた、たった二つの花が印象的だ。日の最も短い日向う山には残っている。その短い日を受けて咲いていた小さな花だ。

「仏の座」と漢字で書くと物物しくて、この花の感じにそぐわない。そのせいかカタカナ表記にする人が多いようだ。

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま たかこ

第三十五回 菜の花・地縛り

菜の花は菜種油をとるアブラナの花、と思っていたけれど、栽培種とそのへんに咲いている花とは多少違うらしい。それはともかく春の最もポピュラーな花である。与謝蕪村の「菜の花や月は東に日は西に」は有名。また山村暮鳥の「いちめんのなのはな」だけがえんえんと続く詩も有名だ。

過ぎゆきてふたたびかえらざるものを なのはな
なばたけ なのはなのはな 村木道彦「天啓」

ひらがなの「なのはな」のくりかえしは、暮鳥の詩と重なる。菜の花畑は郷愁をさそう。過ぎゆきてふたたび返らないものへの思いがふとが込み上げてくるのだ。

振りむけばなくなりさうな追憶の ゆふやみに
咲くいちめんの菜の花 河野裕子「森のやうに獣のやうに」

この歌もモチーフは同じ。村木道彦の影響も感じられるが、共通に菜の花が呼びおこす感傷だろう。「いちめんの菜の花」は暮鳥のフレーズだ。童謡のようになつかしく口をついてくる「なのはな」なのである。

菜の花の黄溢れたりゆふぐれの素焼の壺に処女
のからだに 水原紫苑「びあなか」

素焼の壺はすなわち処女からだ。「壺」から「からだ」へやわらかな存在に転化されたようだが、あくまで壺の硬さを

保っているイメージがある。そこに菜の花の黄があたたかく溢れる。菜の花の歌には「ゆふぐれ」「ゆふやみ」と夕が多いのに気がついた。蕪村の句の「月は東に日は西に」も夕である。唱歌「臘月夜」の「菜の花晶に入り日薄れ」も夕暮れである。

◇◇◇
「地縛り」というと何かすさまじいが、タンポポを丈高くしたようなキク科の黄色の花である。「イワニガナ」ともいう。タンポポより花びらがぎっしりしてなくて繊細な感じ。いちめんに揺れると美しい。茎を這わせて這わせてその節ごとに根を降ろすので地を縛っていく「地縛り」と名がつけられた。たんぽぽという名前をもらった花と較べて損している。最近では外来種の「ブタナ」という、よく似た花もある。これもきれいなのに「豚菜」とはちょっとひどすぎる。

地縛りといふ黄の花がいつせいに風に揺れ合ふ
日本の五月 尾崎左永子「青孔雀」

春から初夏にかけて咲く。「日本の五月」を「地縛り」に代表させているのがおもしろい。「いつせいに風に揺れ合ふ」、こ

の明るい黄の花が「地縛り」というなんて、という感じがあるのだろう。

家妻のわれを嘆かず地縛りという草にさえ黄の
小花咲く 久々湊盈子「あらばしり」

家に縛りつけられている家妻だけと嘆くまい。「地縛り」という、この草だって花を咲かせている。名前からの着想の歌で、小気味よく自らに引きつけている。地を這って縛って根を降ろす、という強さに共鳴もありそう。

ふかいふかい理解のゆえに切れ難くジシバリは
地を縛りて咲けり 水田紅「春の顕微鏡」

これも名前から着想。上では人間関係について語っていて「切れ難く」からジシバリにつないでいる。縛られているような複雑な心理がのぞく。

もともと根が切れ難くて除草がたいへんだから付けられた名前なのだろう。それが人生の機微と結びつけられて詠まれる、これも言葉のおもしろいところである。



アザミ

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第三十六回 アザミ、ヘビイチゴ

「アザミ」と聞くと胸がときめくのはなぜだろう。細い花びらが集まって、やわらかな丸い花。とても美しい。でも茎や葉には棘があつて葉はギザギザ。欺くから「アザミ」、また傷めるの意味の「あざむ」から来ている名ともいう。このどこか野性的な可憐さが人を惹きつける。群れずに野にぽつんと咲く風情も。戦後のラジオ歌謡の「あざみの歌」には昔なつかしい新体詩のような抒情が溢れている。

夕もやに顔うかせたる花あざみ寂しき息を野にただよはす

片山廣子「翡翠」

大正初めの歌。顔とか息とか自分がそのまま花あざみになっているような甘やかな気分が漂う。まさに心の花。片山廣子は

「松村みね子」のペンネームでアイルランド文学の翻訳をしていた。別荘のあつた軽井沢での芥川龍之介との交流は有名だ。この歌も軽井沢での作だろう。薊は西洋の香りも漂わす花である。ここを過ぎれば人間の街、野あざみのうるはしき棘ひとみにしるす

塚本邦雄「水葬物語」

「ここを過ぎれば人間の街」で思い出すのは太宰治の小説（『道化の華』）冒頭の「ここを過ぎて悲しみの市」だが、これも翻訳詩から来ているようなので、塚本の歌もいずれかの踏襲だろう。「人間の街」として「人間」と「野あざみ」の領域の違いをくつきりと出した。俗と聖のような。その棘をひとみに記して人間界に向かう。

秋薊ひかりのあざみひたすらに摘みたくて君の視野をはみ出す

米川千嘉子「夏の空の糧」

春の薊はたいいてい野あざみと呼ばれる。これは秋の薊。摘むのに夢中で「君の視野」をはみ出してしまふ。君の統べる領域の外に出るのだ。これも「あざみ」ならではの象徴性がある。

◇ ◇ ◇

こどもの頃、蛇母の実（へびもち）は蛇が食べに来るようで、ちょっと気味が悪かった。でも蛇とはとくに関係ないようで、なんでこんな名前なのかふしぎである。「枕草子」（清少納言）の「五三章「名おそろしきもの」に「くちなはいちこ」とあるのが「蛇いちこ」だろう。昔からこう呼ばれていたのだ。黄色の小花も紅い実も可愛く、葉の濃い緑も美しいのに。

蛇母あかきゆふべをしばらくは暮れゆかぬ森小さくなりぬ

前登志夫「樹下集」

足もとの蛇母、そこから目を転じての森。すっかり暮れてはいないが夕の森は昼の青葉のかがやきを失って小さく見える。



ヘビイチゴ

蛇母のあかさが拡大していくような、ふしぎな感覚に襲われる歌である。初句に「蛇」が来るインパクトも大きい。墓原へ流るる小川の草叢に蛇母の実われは食ひたり

中野昭子「蜜ぶくる」

蛇母の実はずいぶんおいしい。だからこんな名をつけられたという説もある。この人はそれを食べた。一度食べてみたかったのだ。「われは食ひたり」は食べたぞ、という感じ。しかも「墓原へ流るる小川の草叢」という、あまり気持ちの良くない場所。この雰囲気におかしみがある。

蛇母這はするごとき発疹と思へりひかり浴みて殖ゆるを

川野芽生「Lilith」

ついに発疹の比喩になってしまった蛇母。「ひかりを浴みて殖ゆる」というのは日光アレルギーの蕁麻疹かもしれない。一瞬、蛇を這わせたような錯覚がありつつも、初夏の光に蔓を這わせて殖えてゆく蛇母の実も鮮やかに目に映ってくる。蛇母も名のゆえに独特の歌を詠ませる草だ。



ママコノシリヌグイ

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第三十七回 ママコノシリヌグイ、ナガミヒナゲシ

ママコノシリヌグイは繸子の尻拭い、ということ。茎や葉に下向きのトゲトゲがあるので、それで繸子の尻を拭く、という残酷な発想の名前。棘があるものはいくらでもあるのに。牧野富太郎が付けたと言われるが、もともとと呼ばれていた名を正式名にしたというらしい。タデ科の蔓草で「ミゾソバ」に似ていて、白のつぶつぶの先がピンクに染まった可愛い花をつける。

なよなよし汝の花の名をあはれむや八千草にまじるまま子のしりぬぐひの花 島本赤彦「馬鈴薯の花以前」

明治三十七年の歌「植物採集の歌」の一連より。すでにこの名前で登場し、名前を憐れんでいる。「なよなよし」は文法的

に疑問だが優しい花なのにといいところ。大幅な字余りで名前を入れ込んでいる。
とげとげのまま子の尻のぐいおもしろと吾子は引こずるその長蔓を
これは大正八年の歌。とげとげも名前もおもしろいと子は引っぱって遊ぶ。楽しい母子の情景。

放置田に月光白く波打てりままこのしりぬぐひの花の群落 柏崎駿二「四十雀日記」

この花の群落を詠んだ歌は珍しい。月光の下で目立つような花には思われないが、幻想的なまでに美しく感じられる。

樹の陰にママコノシリヌグイ痛さうな棘を隠して細く絡まる 祐徳美恵子「左肩がしづかに」

茎の逆向きの細かい棘はほんとうに痛そう。意地悪な名前の子でことさらに「痛さう」と意識させられる。それを「隠して」ほっそりと絡まっている。人にも当てはまりそう。

い つころからだろうか。朱色（オレンジ色）のひなげしがいたるところで見られるようになった。街路樹の周りにもよく咲いている。花が終わると長い実を掲げるので「長実雛罌粟」。まるで探知機のような実がどこか異界を思わせる。

ある年の数字がならぶ「ナガミヒナゲシ 発見」と検索すれば やすたけまり「ミドリツキノワ

ナガミヒナゲシが初めて発見されたのは一九六一年、世田谷区であるという。並んだ数字は1961だろう。「その年にどこからわたしも着いた」という歌もあり、この年に作者は生まれたらしい。野草の種子の着床に自らを重ねたユニークな歌。

肉色の長実雛罌粟咲き揃い五月の朝を明るくしたり 中川佐和子「花桃の木だから」

周辺の生育はばむと思えざる明るさ持てりナガミヒナゲシ 同

花の色の印象は人によってかなり違う。私はナガミヒナゲシは淡い朱色で美しいと思っていたので「肉色」という表現にちよつと驚いた。でもそこに明るさを感じている。二首目のように、ナガミヒナゲシは繁殖力が強く危険外来種の駆除の対象になっている。そうは思えない、という歌。

にじみえる血をしふふめる人肌のいろとも見えながみひなげし 川崎あんな「びくにつく」

この歌も、滲んだ血をふふむ「人肌のいろ」という。「肉色」と共通しているのがおもしろい。急に殖えたふしぎな花。それは少し無気味な感じをもたらしているのかもしれない。最近では駆除されたのか減ってきているようだ。



ナガミヒナゲシ



矢車の花

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま たかこ

第三十八回 矢車の花、ユキノシタ

「矢車の花」は矢車菊のことで、初夏に夢のような青や桃色の美しい花を咲かせる。とくに青むらさきの花の色は印象的だ。ドイツロマン派のノヴァーリスの小説「青い花」はこの花だとも言われていて、憧れを象徴する花なのだ。ヨーロッパ原産で日本には明治に帰化したらしい。

函館の青柳町こそかなしけれ／友の恋歌／矢ぐるまの花

石川啄木「握の砂」

啄木が函館に住んだのは明治四十年五月から八月。職を得て、妻子も母も呼び寄せ、友にも恵まれた短い幸福な時期だった。八月の函館の大火で去らねばならなくなるまでは。あの青柳町が愛しく哀しい。「矢ぐるまの花」が東の間の幸の象徴の

よう。(歌集ではこの歌は三行書きである)

当時新しかった矢車の花は好まれたようで北原白秋や長塚節などにも詠まれている。

牧草に種子まじりみし矢車の花咲きいでて六月となる

石川不二子「牧歌」

牧草の間に咲く矢車の花。酪農をしていた作者らしい情景の歌である。種子がまじっていて思いがけず咲きだすうれしさ。初夏の労働の疲れを癒したことだろう。

矢車の花咲く苑を歩み来て君の心に棲む人を問ふ

栗本京子「水惑星」

いつしよに歩みながら、こんなことを問う。片思いなのだろうか。初々しい恋のシーンに矢車の花がよく合っている。

ちなみに「矢車草」というと、違う種類の花もあるので、その呼び名は使わないようである。

◇ ◇ ◇

ユキノシタは自生する山野草だが、どこにでもよく植えられている。葉っぱは小さい路のように丸い。白い尖った花弁が二枚下向きについていて、ちらちらと雪が降っているような風情に咲く。

ユキノシタすつと伸びたるはなびらの尖りて白しこれぞ雪の舌

柏崎駿二「四十雀日記」

虎耳草・鴨足草いづれ煩瑣なり「雪の舌」清し白花の冴え

同

「ユキノシタ」の表記はさまざま。「雪の下」とも「雪の舌」とも書く。「雪の舌」こそがいい、と表記に拘った二首である。断固として言っているのが面白い。この花が好きなのだ。

ユキノシタ、羊歯のたぐひも怖ろしき春をはるころ眼鏡は透きて

前川佐重郎「彗星紀」

「雪」とつくけれど花期は晩春から初夏である。羊歯といっしよにされているが、ユキノシタも日陰のじめつとしたところに妙な花が咲いていて、薄気味わるいといえは言える。「怖ろしき」とまで言う感覚が独特だ。「眼鏡は透きて」は、眼鏡をかけたとたんふいにまざまざと見えた、という感じだろうか。やはり近眼の私にはわかる気がする。

虎耳草しぼりて母が創口に注ぎしは如何なる創口にあらむ

佐波洋子「光をわけて」

ここでは「虎耳草」の表記。「こじそう」ともいう。でも作者の家では「とらみみそう」と言っていたのかもしれない。字数ではそう思える。葉を煎じたものは解毒作用があり、薬用としてまざまざに使われてきた。植物名だけをおぼえていて、何の創のときだったか不明なところがなつかしさを呼ぶ歌である。



ユキノシタ



かやつりぐさ

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第三十九回 かやつりぐさ、あかざ

かやつりぐさはむろん「蚊帳吊草」である。茎が三角柱で、それを二人で引つぱると四角のかたちになって蚊帳に似るからだという。四角だから蚊帳、というのは今ではわかりにくい。子供の遊びだがけっこう難しいようだ。私はまだやったことがない。こんな遊びから命名されたというのも不思議な感じがする。三角の茎は植物でかやつりぐさだけらしい。

かやつりぐさ子ども二人の手に裂かれ香にほひつつ蚊帳の形す
五島美代子「風」

その遊びを詠んでいる歌。「二人の手に裂かれ」草の香を発して「蚊帳のかたち」をする。何か痛々しいかやつりぐさ。やわらかな調べの中に「裂かれ」という言葉があつて、そんな感

じがしてしまう。蚊帳なんてあずかりしらぬことなのに。稲びかりわが庭の上をとびしとき夜目に見たるはかやつり草か
片山廣子「野に住みて」

稲びかりに浮かび上がったのは「かやつり草」らしい。茎の先に葉が放射状にひろくかたちは独特。これは「かやつり草」だと知覚する一瞬がとても印象的でシュールな感じさえする。

かやつりがもう咲き出して夏至までの時間をさらは斜めに走る
前田康子「キノエノコロ」

放射状に伸びた葉の間に短い穂が出る。これが花穂で、茶色っぽくもじやもじやした感じ。だいたい夏ごろだが夏至の前

に「もう咲き出して」と、かやつりぐさの花の時期をちゃんと把握している。「時間をさらは斜めに走る」が独特な感覚。「斜め」が、どこか、かやつりぐさの幾何学的な造形とフィットしているようだ。

◇ ◇ ◇

「や」とりせむあかざの杖になる日まで」という松尾芭蕉の句があるが、あかざの杖は軽くていらしく今も販売されている。そのへんによく見る丈高い雑草で、若芽がうっすら赤いので「あかざ」、白いのは「しろざ」という。昔から食用にもしたようで、「徒然草」(第五十八段)に「あかざのあつもの」(汁らしい)と、貧しい食べ物例としてあげられている。錫となり銀となりうす赤きあかざの原を水の流るる
与謝野晶子「青海波」

あかざのうす赤い原の中を水が流れている。花も赤紫なので、花の時期かもしれない。流れの陽のささないところは錫のいろ、まぶしいところは銀のいろに。大景の配色がみごと。明治四十四年頃の作で晶子は三十代。珍しい叙景である。



あかざ

労働歌とどろき過ぎし道のはたあかざの薄き葉はそよぎをり
大野誠夫「薔薇祭」

大野誠夫「薔薇祭」

うとましき写真なれどもかほの若し戦後あかざの原の深きに
河野愛子「黒羅」

河野愛子「黒羅」

「あかざ」は戦後の風景として詠まれることが多い。よく食べられてもいたから、あちこち生い茂っていたのだろう。昭和二十一年の大野の歌は、労働歌をうたいながら人々が過ぎたあとの、あかざの葉のそよぎを詠んで、いかにもわびしい。戦後の写真を眺めての河野愛子の歌。その時期、愛子は結核を病んでいた。辛かったころだが、その顔は若い。「あかざの原の深きに」がその顔を浮かび上がらせている。

そぼそぼと藜に降れる雨をおもふ幾万粒のなかの幾粒
大辻隆弘「景徳鎮」

大辻隆弘「景徳鎮」

あかざは「藜」と書く。藜に降る雨というものを思っている。そこにだけ降る雨の粒を。思索的な趣の歌である。



なでしこ

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第四十回 なでしこ、ほおずき

「草」の花はなでしこ」と『枕草子』で真っ先にあげられて

いる撫子。『万葉集』から王朝和歌、『源氏物語』にもよく登場する。「秋の七草」の一つだが夏に咲き「常夏」という別名でも和歌に詠まれる。ほっそりとやさしげな風情が撫でたくなるから「撫子」。「やまとなでしこ」は元は渡来種の「唐なでしこ」と区別した言い方だったが、いつからか「やまとなでしこ」が日本女性のことを指すようになったようだ。

野撫子浜なでしこと異れり都のいろの真野のなでしこ

与謝野晶子「心の遠景」

「真野」という地名はあちこちにあるが、これは佐渡の真野で、承久の乱で配流された順徳天皇の陵がある真野。そこに咲

くなでしこにどこかゆかしい都のいろを見ている。逆境の天皇を慰めたなでしこの花を想っているのかもしれない。「なでしこ」のくり返しの調べが魅力だ。

あわきあわき撫子の蒼白き阜はるかにもわが時のみなもと

高安国世「朝から朝」

撫子の花はたいいてい桃色だけれど、これは白い花の蒼だろ。野の小高いところに苔が淡く白く広がっている。撫子を詠んで「時のみなもと」という抽象性は珍しい。

冬も咲く撫子は風に傷みつづされどなでしこ冬を生きゆく

北沢郁子「冬なでしこ」

撫子は冬咲くこともあるらしい。繊細な花が傷んでいる。「されどなでしこ」には「やまとなでしこ」の健気さを見ているよう。

◇ ◇ ◇

酸漿の実を採むのは楽しいけれど鳴らせたためしがない。

だれが考えついた遊びなのかふしぎで絵のような情景である。「ほおずき」は鳴らす頬から来たという説も可愛い。「鬼灯」とも書き、これは盆に先祖が帰る目印の灯として飾られるからだという。郷愁をさそう日本の夏の風物詩である。

死にし子のなきがら負ひて来しときに酸漿のとき入日を見たり

鈴木幸輔「谿」

酸漿のくれなみ深くなりたれど摘む子なくして時雨わたりぬ

同

敗戦の昭和二十年の九月、作者は秋田で病む子を亡くした。子のなきがらを負って入日を「酸漿のとき」と詠む。酸漿で遊んでいた子が思い出されたのだろう。そのうち時雨のころに

子を偲んで酸漿の歌が五首並んでいる。哀切極まりない。時雨の時期にもまだ酸漿が残っていたのだ。

網目ばかりとなりてしまひし蓐のうちほおずきの太陽が坐りてをりき

小林幸子「あまあづみ」

蓐が赤い袋になって実を包む。ふしぎな植物だ。その袋が白い網だけになっているのを時々見る。まるで籠の中に実があるようで、一種しゃれた美しさだ。中の赤い実を「太陽」と詠んだ歌で「坐りて」の擬人化がおもしろい。

酸漿のひとつひとつを指さしてあれはともし火すべて標的

服部真里子「行け広野へと」

「あれはともし火」から「すべて標的」への転換がシャープだ。「ひとつひとつを指さして」がすでに「標的」を予感させているともいえる。赤い酸漿を撃つイメージがあざやかに顯ってくる。

酸漿を心臓に見立てる歌も共通にいくつか見られた。驚いたのだが、酸漿はさまざまなイメージを呼び込むのだろう。



ほおずき

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第四十一回 風草、ヨウシュヤマゴボウ

「風草」とはすてきな名前だ。イネ科で白い細かな穂粒をつけてやわらかにそよぐ。微妙な風の有無を知らせるから、この名がついたという。秋に薄紫の花穂をつける。別名「風知草」ともいうが、一般的に風知草といわれる植物は別物である。

風草は道のほとりにすいと伸び車の来れば身ぐるみなく

むらがついていない風草の一本だろう。すいと伸びている。自然の風に吹かれてこそ「風車」なのに、車の風圧でいきなりなびく。心ならずも「身ぐるみ」なびいてしまう風草があれだ。

けれど、とりとめなく足元に触れる風草が感じられてくる。一首のなかに「足元が」があるのと無いのではかなり違う。

「風草」とよく似た草に「ニワホコリ」があつて、こちらは「庭の埃」だなんて残念な名前をもらっている。確かに少し貧しげだが、ここまで名前が違わなくとも気の毒だ。

◇ ◇ ◇

ヨウシュヤマゴボウのヨウシュは「洋種」。明治時代に渡来したので、日本の山野に生える「ヤマゴボウ」と区別している。秋に葡萄のような赤黒い房実を垂らす。柄もピンクだから、ちよつと毒々しい。根っこがゴボウに似ているのだという。子どもの頃、汁がつくと落ちないとか、毒があるとか言われて避けていた記憶がある。実際、果実も根も有毒なのである。隣よりはびこるアメリカ山ごぼう濃き紅の紅葉を愛す

土屋文明「続青南集」

漸くに成りし吾が前の簡易区道突き貫き茂る蓬
アメリカ商陸

同「続々青南集」

風草は夕映えに透け豊かなる白髪はくはつの祖母思い出したり

遠藤由季「北緯43度」

むらがついていない風草は白く霞んでうつくしい。夕映えに透ればなおのこと。そのとき白髪の祖母を思い出す。風草から引き出される祖母の面影はやわらかく、作者を慰撫するようだ。祖父母を詠む一連の中にある歌である。

十年後などと思えば足元が風草のごとかなしくなりぬ

永田紅「いま二センチ」

何かについて十年後はどうなっているのだろう、などと思つたとき、ふいに、足元が風草のようになくなった。比喩だ

昭和三、四十年頃の青山の文明宅の近くには、かなりはびこっていたようだ。葉は紅葉して美しい。きつぱりと「愛す」が面白い。二首目はいかにも文明の散文調。ここでは「洋種」でなく「アメリカ山ごぼう」。「商陸」は中国漢字表記である。植物名は実に表記が多様なのだ。

たわわなる洋種山ごぼう刈り倒す鎌のひかりの先のわれ

百々登美子「荒地野菊」

たわわに実をつけた「洋種山ごぼう」を刈り倒す鎌のひかりが目に入る。「ひかりの先のわれ」と字足らずでの結句はめずらしい。その鎌が自分にも及ぶような怖れだろうか。

水に泛く藻を見むとして沼べりの赤き商陸に觸るにかあらむ

森岡貞香「黛樹」

「商陸」だけが、これも洋種であろう。「触るるにかあらむ」は触れたかも、触れるんじゃないか、という微妙な感じ。沼を覗きこもつとして、触れることへのかすかな危うさを意識する。この禍々しさがヨウシュヤマゴボウの魅力かもしれない。



ヨウシュヤマゴボウ



すすき

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第四十二回 すすき、山椒

日 本の秋といえはすすき。お月見には欠かせない。どこにでもあったが一時は外来種の背高泡立草に押されて衰退が危惧された。でも最近すすきがまた盛り返しているようである。まじっている風景も美しい。

枯れすすき遠く光れる用水道大根をおひて女きたる

古泉千樫「青牛集」

両側におほひかぶさるすすきのなかすみたる水のみちて流るる

同

大正八年の「武蔵野」という一連の中の歌。「用水道」は玉川上水かと思う。私にもなつかしい風景である。かつて武蔵野は

この「洪水」は二〇一九年十月の台風での千曲川の決壊。すすきは伝統的に「尾花」とも言われる。現実の洪水の記憶の強さが、その優雅な「尾花」を描らすのである。漢字では「芒」「薄」と書くが「芒」が正しいようだ。

◇ ◇ ◇

薬 味でおなじみの山椒。ミカン科で古来山地に自生している。「はじかみ」とも言う。木の芽のさみどりの美しさとその香り。実山椒は初夏の青実をとって漬ける。秋から冬へ赤く色づきこれも美しく、粉にして薬味になる。

山椒のあかきがはぜて落ちむとす鳥がねさへも起たぬ山中

生方たつゑ「春盡きす」

鳥の声も聞こえない静まり返った山中。採る人もない山椒の実が、秋に赤くはせて今にも落ちそう。辛いから鳥は食べるのだらうか、と思つて調べたら、メジロその他が食べるそう。

春のめだか雛の足あと山椒の実それらのもの一つかわが子

中城ふみ子「乳房喪失」



山椒

すすきの群生地、そこを開墾して畑にしたという（柳宗民の雑草ノオト）より。遠く光る枯れすすきが、歩くにつれて、用水の両側におおいかぶさる。水はたつぷりと澄んで流れる。

能果ててみな散りぢりになりしかば月かげ凝る穂すすきの原

藤井常世「水の貌」

能舞台（井筒）に添えられた一叢のすすきが、一面の穂すすきの原になる。能を観たあとの心象風景がくつきりと表出されている。すすきは過ぎ去った「時」の象徴なのだ。

洪水の記憶のこれる眼もて小春日の野に尾花揺らしぬ

目黒哲朗「生きる力」

わが子をたどて「春のめだか」「雛の足あと」に「山椒の実」が入っているのがユニーク。「小粒でピリリと辛い」の意味もあるのだらうか。あげられたものはどれも山野の自然の息吹にみちていて素朴だ。「山椒の実」もふみ子のいとおしく思うものだったに違いない。これは青い粒実だらう。

山椒の実の色づいてたわわなり方代さん待っているのだ

山崎方代「こおろぎ」

自分の歌に自分の名を入れるのがいかにも方代の歌。野趣に富む食を愛する方代は色づいた山椒も採っただらうか。

山椒の実のくれなゐを潰す夜はくらくら雪もまんじどもゑぞ

馬場あき子「月華の節」

出羽黒川での歌。作者は長年、黒川能に魅せられて通いつめていた。黒川には独特の山椒料理もあるようで、王祇祭のためにみんなが作業しているのだらう。雪がまんじどもえに（入り乱れて）降る夜、山椒の実のくれなゐを潰していく。その陶酔にも似た雰囲気「くらくら」とめくるめくよう。

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第四十三回 ピラカンサ、いのこずち

秋 から冬にかけて住宅地などでいちばんよく見かける赤い実はピラカンサだ。あまりにぎつしり実がついていて、美しいというより実りすぎではと思ってしまう。明治時代に渡来した栽培種。「ピラカンサ」はトキワサンザシ属の総称で、植物名ではないとのこと。種類は多いが「ピラカンサ」で通用している。

ピラカンサの百万の実失せにけりひよどりの胸に灯るくれなる
稲葉京子「秋の琴」

ピラカンサしか喰うものなくて雪の日の窓を光らす鴨の声
齋藤芳生「湖水の南」

ピラカンサとひよどりはよく詠まれる。他の鳥も食べるけれどひよどりが群れると来ないのだろう。ピラカンサの秋の実は鳥は食べず、冬になってよく熟すと食べ始めるらしい。こんなにくさん食べた胸も「くれなる」に灯る、という一首目。童話のような発想が楽しい。二首目は「喰うものなくて」という言い草が面白い。鴨の声が窓を光らすのも斬新だ。

事務室の窓にピラカンサ輝いてビタミンを飲む時間がきたり
早川志織「種の起源」

ピラカンサはむやみに元気な感じがする。その輝きを見て「あ、ビタミンを飲む時間だ」と思う。ピラカンサの実がビタミン剤に似ているのかも。

ピラカンサまたはピラカンサスといふ冬の視界の隅にあるもの
石川美南「離れ島」

複数形で「ピラカンサス」ともいう。「または」と繰り返したリズムの面白さ。ただ赤く冬の視界の隅にあるものをこう呼ぶ。

い がいがのとげ状の実がくつついてくる植物はいろいろある。おなもみとか梅樫草（ひつつき虫）とか。いのこずちもそのひとつ。しっかりとついでなかなか取れない。「猪の子榎」と書き、漢名では「牛膝」という。茎の節が膨らむと動物の膝に見えるというところらしいが見てもよくわからない。

野をゆけば色身に付く牛膝わたくしを濃くかくはしうせり
高野公彦「雨月」

いのこずち実をたくはへて立つほとり水流は行方もちて急げり
同

野をゆくとき色身（うつつの身体）に付く牛膝。草の種という命が添って、わたしを濃くかくわしくする、という感受だろうか。仏教用語の「色身」と「牛膝」という文字が滋味を深めている。二首目は「いのこずち」と「水」それぞれの自然の摂理を提示する。「いのこずち」のたくわえた実は、いずれどこかに運ばれてゆくのだろう。

ソックスにしがみついているいのこずち古墳の森のみどりごと
道浦母都子「あふれよ」

「古墳の森のみどり」という発想におどろかされる。古墳の森を歩いてきたとき、ソックスにしがみついていた種子が可愛かったのだ。たしかに「猪の子榎」の名にも「子」がある。

今日われの上半身の輪郭をなしいしTシャツにつく牛膝
永田淳「光の鱗」

脱いだTシャツに牛膝がついている。このTシャツは今日の自分の上半身の輪郭をなしていた。上半身につくような動作の痕跡がここにある。今日の時間への感慨を牛膝に覚えている。



竹

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかし

竹、笹

第四十四回

「竹」はイネ科の植物だが、草なのか木なのかという判断としないらしい。「広辞苑」で見ると「多年生常緑木本の総称」、「ブリタニカ百科事典」には「木質で多年生の茎をもつ植物の総称」と出ていて何のことやらよくわからない。春に黄ばんで散るから「竹の秋」は春の季語で、秋に青々とするから「竹の春」は秋の季語になっている。冬も青々としていて雪によく映える。「白雪は降り隠せども千代までに竹の緑は変らざりけり」(紀貫之・「拾遺和歌集」)とも詠まれている。

降り積みて雪はかがやく少年のソプラノのごとし竹の葉の青

柳宣宏「与葉」

竹の葉の青を「少年のソプラノのごとし」と声に聴える。芭

竹の節と節のあいだは空洞。そこに座ってみたら外光はどう透いて来るのだろう、と想像する。真っ暗ではなくほのかに明るような気がする。かぐや姫をここに置いた「竹取物語」の作者もそういう想像をしたことだろう。

◇ ◇ ◇

笹は「小形の竹の総称」と辞典などにはあるし「小竹」とも書くが、植物学的には竹とは違いがいろいろあるらしい。似てはいても、ふだんの印象としては別物に思える。「ささ」という名前は小さい、細いから来ていると思うが、風に鳴る音のようにも感じられる。「笹の葉はみ山もさやにさやげども我は妹思ふ別れ来ぬれば」(柿本人麻呂・「万葉集」)は絶唱だ。「さやに」はさわざわということで、山じゅうに笹のさやがみちていて、その中に別れた人を思っている。

大西民子「風の曼陀羅」

山道を歩くとこういう情景によく遭遇する。あらわになった「けものみち」は熊笹の中かもしれない。笹をかきわけて進む



笹

蕉の「鴨の声ほのかに白し」と声を色に聴えた句を思い出すがこれは色を声に聴えてユニークだ。雪のかがやきとみずみずしい竹の葉の青。その清涼さがこの比喩に打ち出されている。

近づけばかすか退く竹群はわれを窺うごとく揺れおり

岡部桂一郎「竹叢」

「近づけばかすか退く」はずはないが、そう感じられるのがおもしろい。退いてこつちを窺うように揺れている竹群。たしかに竹群は生き物のような気配にさわめき揺れる。

竹節の小空間に座しをればいかに透きくる外光ならむ

古谷智子「ガリバーの庭」

はめになることもある。「熊笹の音のみのして」がいかにも山中の寂しさ、こころもとなさを感じさせる。

世をはやく捨てたる祖父の斧ふりて拓きし畑、笹群おほふ

成瀬有「海やまの祀り」

もともとは農ではなかった祖父が世を捨てて孤獨に畑をつくったということなのだろう。そのあとは継ぐ人もなく笹におおわれてしまった。祖父の人生の跡もない寂しさが沁みる。

ひそやかな折れみちをゆき月の瀬に鮎刺す笹を手わたされた

小黒世茂「九夏」

「月の瀬」は和歌山の地名でもあり、月の夜の瀬でもある。そこに鮎をとりに行っている。「鮎刺す笹」は鮎を通してぶらさげるための笹の小枝ということのようだ。手わたしてくれたのは地元の漁師か誰かだろう。月明かりのみの幻想的なまでのふんいきが魅力の一首。

笹は鮎に敷いたり、ちまきや笹寿司など食べ物に縁が深い。笹舟もなつかしい。日本人にとって笹はとても親しいのだ。





福寿草

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第四十五回
福寿草、落

福寿草はキンボウゲ科の山野草で江戸時代から栽培されたらしい。正月に咲くから縁起物として庭先や鉢植えの花というイメージがあるが、山で雪の中に咲いているのに出会ったらどんなにときめくかと想像する。「福寿草」なんて勝手におもてたい名前をつけられて気の毒だ。

福寿草のかたき苔にこの夕息ふきかけてゐる子どもはや

島木赤彦「太虚集」

「しはす」というタイトルで六首、みな福寿草と幼子を詠んでいる。幼子が遠くまで行つて買つてきた福寿草。早く咲いてほしいと息をふきかけるといのが可愛らしい。他の歌では夜、明け方の火にあてている。福寿草もいい迷惑。

福寿草黄金の花ひらくつつみたる光の渦を解く
ごとひらく

上田三四二「照徑」

やわらかく包む冬の光。「光の渦を解くこと」と凝った表現で福寿草の花を讃美している。

煤色のオイル抜かるるトラクター福寿草の黄の
覗きゐる庭

時田則雄「夢のつづき」

トラクターと福寿草が一首に同居するのは珍しい。色の対比も印象的。「オイル抜かるる」トラクターにも、福寿草にも生命を感じている。北海道十勝平野で農場を経営する作者にとつて、トラクターは分身のようなものである。

来年は咲くか咲かぬかわからない福寿草みたいな
な私を見てゐて

浦河奈々「サフランと釣鐘」

「福寿草」という名ゆえに、来年は幸を咲かせるかどうかかわからない私にたとえてユーモラスでどこか儚い。

◇ ◇ ◇

落はキク科の日本原産の自生植物。よく食すから栽培もされてい。早春にうれい落の薹は落のつばみなのか花茎なのか、記述がさまざまで混乱する。「薹が立つ」ということだが、薹が過ぎて食べられない、ということだが、落の薹の場合は薹が旬でその後、花になると旬を過ぎて食べられない。逆な気がする。

ふきのたうひとつ見つけて昨までの無念も苦く
浄まるごとし

小中英之「過客」

昨日までの無念も浄めてくれるようだ、という大仰な表現で、ふきのとうをひとつ見つけた喜びをうたい上げた。ふきのとうだから「苦く」と言ったところが味噌になっている。

「その辺の草でも食つてろ」「ああ食ふは」先ず
は雪間の落の薹から

小関祐子「短歌往来」二〇二四年十一月号

最近の雑誌で見つけた歌。罵りのセリフをそのまま返す応酬から「雪間の落の薹」に行く。目のさめるような展開だ。

雨なかの落の葉のこはきむらがり荒く息づき
蝦蟇もひそまむ

森岡貞香「白蛾」

「こはき」は「剛き」で、大きくなった落の葉はこわごとと猛々しい。そのむらがり全体が「荒く息づき」に生命力の感受がある。この中に蝦蟇もひそんでいることだろう。

落の葉を傘にして遊ぶ子にまじる老いの傘に
も雨落ちてくる

一ノ関忠人「さねさし曇天」

二〇二四年に出た歌集から。落の葉の傘は絵や童話でもおなじみ。今でも傘にして遊ぶ子らがいるのだ。まじる老いの傘にもおのずから雨は楽しく落ちてくる。



落



辛夷

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかこ

第四十六回
辛夷・杉

モ クレン科で花は木蓮に似ているけれど、辛夷は昔から山地に自生している。その点で印象がだいぶ違う。山に辛夷の白い花を見るとああこれから春だと思う。田打ちを始めるころに咲くので「田打桜」とも呼ばれる。

春くればまづ花しろきこぶしの樹それをめぐり
てあるけものみち

齋藤史「ひたくれなゐ」

陽に炎えて山こぶし咲く 人界をのがれしものが振る春の旗

同「渉りかゆかむ」

「春くればまづ」の出だしから、いきなり白い花が現れる感じ
で「こぶしの樹」「けものみち」と上下の名詞止めがきびきび

している。けものみちに開かれたこぶし、人界を逃れて春の旗を振るこぶしは、信濃に生きる齋藤史の意志の花のようだ。はるかなるものの悲しさがよひて辛夷の花の一本が見ゆる

佐藤佐太郎「帰潮」

こちらは街路の辛夷の一本。遠く見えたというよりは、辛夷の花じたいがはるかな存在というオマージュだろう。街にあって人も人界を超えたもの。その悲しきにかがよう。白木蓮だこの感じはない。うたい上げた調べが美しい。

窓に満ち辛夷はな咲く日の曇り古い病む家に犬
老いて鳴く

成瀬有「流離伝」

これは庭木の辛夷。窓に満ちる花は明るい、その家は老人が病んで犬も老いて鳴いている。上下を逆にすると辛夷の花が救いになるが、その家の陰鬱さの方を結句にして、やりきれなさが滲んでいる。辛夷は人の現実を離れた花なのである。

◇ ◇ ◇

二月にもなるとそろそろ杉花粉が心配になってくる。私もひところ花粉皮膚症に悩まされた。杉は日本にしかない固有種だという。古来親しまれ崇められてきた木であるのに、花粉のことでこんなに疎まれるとは気の毒だ。「いにしゑの人が植ゑけむ杉が枝にかすみたなびく春は来ぬらし」（柿本人麻呂・「万葉集」）の「かすみたなびく」は春霞であるのに、まるで花粉のように思えてしまう。

殖林の杉ひしびしと左右より径さしはさめり吾
は通るも

木下利玄「二路」

「殖林の杉」という五首から。径を狭める杉の圧倒的な気配が伝わってくる。「吾は通るも」の吾の存在のかほそさ。これは大正期の歌である。日本は杉の植林をしては立派な杉山をつ

杉山の花粉は山に山火事のけむりのとき
ち靡く見ゆ

花山周子「林立」

実際に見ているわけではないが、すさまじい花粉のさまを誇張したイメージと古典的な様式で歌い上げる。「林立」は杉の植林問題をテーマにした歌を多く収録している。

ひとり識る春のさきふれ鋼よりあかるくさむく
降る杉の雨

三枝昂之「水の覇権」

春のさきふれを杉の雨に感じる。「鋼」のイメージは降る雨にかかると杉にもかかっている。「鋼よりあかるくさむく」という比較が独特だ。直立する杉の冬の意志に自らを重ねつつ、まださむくも春のあかるさが開けてくる思い、とてもいえるだろうか。

杉はこういう丈高さを象徴する木なのである。



杉



馬酔木

草・木・花・実

花山多佳子 ●「塔」選者
はなやま・たかし

第四十七回（最終回）

馬酔木、木瓜

馬酔木は「アシビ」「アセビ」と読む。白や淡い桃色の鈴のかたちの花をびっしりと垂らす。葉も実も有毒で動物は食べないから「馬酔木」と書き、アシビは「悪し実」から来ているともいう。古来親しまれてきた花で「万葉集」にも多く詠まれた。「磯のうへに生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありと言はなくに」（大来皇女）は、刑死した弟の天津皇子を悼む歌と言われる。馬酔木は手折っても見せたい花だったのだ。

花の咲く馬酔木のかげに吾が居れば山の獣やすらふごとし

斎藤茂吉「寒雲」

馬酔木の花かげにやすらいでいるのだが、山の獣のように、

という感覚がおもしろい。馬酔木の花はふっさりとしたたかく古くからの野性の木だから、こんな気分にもなるのだろう。葬りきて花おぼろなる夕庭の馬酔木の下に耐へがたくある

岡野弘彦「飛天」

父の挽歌の一連から。岡野の実家は伊勢と大和の国境の山村であった。庭にも馬酔木があるこの地方の雰囲気を感じられる。長病みであった父への沈痛な思いはそのおぼろな花にも慰まず、耐えがたいのだ。

花馬酔木ゆらぎて石に膝つけばわれによぎらぬ
ペレニスの髪

山中智恵子「紡錘」

「ペレニスの髪」（髪座）というおぼろな星雲があるらしい。馬酔木の白い花のゆらぎに、その星雲をふと思う。「よぎらぬ」とあえて言うのはつまりよぎったということなのだ。星座好きの智恵子ならではの飛躍した着想の歌。

木

瓜はなぜ「ほけ」なのかと思うが「木瓜」を「もっか」「もけ」などと音読みしているうちにそうなったらしい。

でも「ほけ」はちよつと気の毒だ。実が瓜に似ているから木の瓜と書く。木瓜の花は完璧に咲くと完璧に美しく大好きな花だ。まん丸な蕾もかわいい。低く敷の中に咲いている緋木瓜の花を発見すると胸がときめく。平安時代に渡来した植物だというが和歌には登場していない。

一生を棒に振りたるくやしさにかかはりもなく
木瓜の花咲き

永井陽子「小さなヴァイオリンが欲しくて」

木瓜の花はいかにもおっとりとかくんで咲く（人のくやしなどにはかわりもなく）。「棒に」と「木瓜」のボ音が何となく響き合う。



木瓜

墮天使の歩む背後に言い知れぬ幸いとして赤き
木瓜咲く

花山多佳子「樹の下の椅子」

若いときの自作である。木瓜の花を見て言いようのない幸せな気分になった。地上にはかつて天使であった人も歩いているだろう。そんなイメージで「墮天使」を配してみた。ここが「仙人」だともうに東洋画だと今にしておかしくなる。

あ、まちがえた、とつぶやく子どもの鼻濁音嬉しくてほんと咲く木瓜の花

斎藤芳生「花の渦」

「まちがえた」の「が」の音が鼻に抜けたのがかわいいな、と嬉しくて、あたまたまほんと木瓜の花が咲く。実際に木瓜がそこにあつたのかもしれない。この気分が絶妙にこの花だ。作者は学習塾の先生。教室での瞬間がいきいき。